

## 氣長足姫尊（神功皇后）

一、そのはじまり

二、穴門あなとの豊浦宮とゆらのみやと熊襲くまそ

三、橿日宮かしひのみやの神託

四、皇后うけひの祈

五、未来へのワープか、過去への回帰か？

六、天下分け目の戦い

七、時空のマジシャン

八、武内宿禰たけしうちのすくね

九、皇后のみどころ

十、おわりに

# 一、そのはじめ

おきながたらしひめのみこと  
 氣長足姫尊（神功皇后）は足仲彦天皇（仲哀天皇）の皇后である。父は、近江国坂田郡（長浜、米原あたり）に勢力を築いた氣長宿禰王であり、わかやまとねこひこおほひひのすめらみこと  
 稚日本根子彦大日天天皇（開化天皇）と和珥臣の遠祖、姥津命の妹、姥津媛の子孫である。母は新羅の王の子、天日槍を祖とする田道間守の血をひく  
 かづらきのたかぬかひめ  
 葛城高頼媛であり倭（奈良）、近江、北陸、半島を視野に置く一族の女であった。

和珥は和邇とも記され、二世紀の後半に北陸、若狭の方面から近江そして奈良へと渡来してきた太陽信仰を持つ鍛冶集団とみなされている。伝統的には、日本海側が表日本であり、対馬海流を筑前、長門、石見、出雲（隠岐）、伯耆、因幡、但馬、丹後、能登を越え越へと北上するルートが一般的であった。

半島では馬韓（後の百濟）、辰韓（後の新羅）、弁韓（後の加羅諸国）の時代である。駕洛国記によれば、亀旨峰に天から箱が垂れ下がり、開けると、六個の黄金の卵があり、翌朝孵化して童子となり、その童子を王に迎え、この地域に国が誕生したという。それぞれが駕洛国、大加耶、星山加耶、阿羅加耶、小加耶、こねい  
 古寧加耶、加羅六国の王になるが、駕洛国は加耶、伽羅、狗耶国、南伽羅、金官国とも称され、対馬から望見され、良港があり、古来より倭人が往来する拠点であり、鉄の産地でもあった。鉄というと、鉄器、武器を想像するひとが多いが、鉄鋤、農具であり工具、土木建築事業におおひなる技術革新をもたらし、また、貿易で貨幣代わりに決済に用いられ、大変重宝にされたものである。

その意富加羅国の王子、都怒我阿羅斯等が敦賀の港、氣比を訪れ帰化を求めたという話がある。実は、彼は童女を追いかけてやってきたともいう。なんでも、農作業に使っていた黄牛がある男に食われ、その代償に白石を得、寝所に持ち帰ると美麗き童女に化し、これと交わらんとすると、忽然と消えたそうである。彼の妻は童女が東の方から来たものであると告げ、彼は童女を追ってやってき、童女は、日本の難波の比賣語會社の神、あるいは、豊国の国前郡（大分県東国東郡姫島村）の比賣語會社の神の化身であったという。倭人が半島の女を求めるという話もしばしば見え、特に美人とされる新羅の女を憧れたようである。相互に女を求めて往来があったようで、まだ国といっても邑の集合体のようなもので、治める部族長がいる、部族連合を形成する族長がいるというもので、国家というより、どの氏族の女であるかが先に立つ、外国人を求めるような意識ではあるまい。（日本書紀では国という言葉を用いるがこの時には中央集権的



あめのひ

やまと

う  
ち

日進閣

おきながたらしひめのみこと

氣長足姫尊はそういう話を聞いて育っていた。その彼女に、天皇の皇后に

たらしなかつひこのすめらみこと

という話を持ち込まれた。その天皇とは、足仲彦天皇（仲哀天皇）といい、

やまとたけるのみこと

いくめいりびこいさちのすめらみこと

むすめ

ふたつういりびめのみこと

あの日本武尊と活目入彦五十狹茅天皇（垂仁天皇）の女、兩道入姫命との

おほなかつひめ

みめ

かこさかのみこ おしくまのみこ

第二子であられた。天皇には、大中姫という妃がおられ、麿坂皇子・忍熊皇子

ひこひとのおほえ

むすめ

をなしておられた。大中姫は、彦人大兄（日子人大兄王）の女であり、彦人大兄

いなびのわかいらつめ

やまとたけるのみこと

はりまのいなびのおおいらつめ

の母は伊那毘能若郎女といい、日本武尊を産まれた針間之伊那毘能大郎女

はりまのいなびのおほいらつめ

（播磨稻日大郎姫）の妹にあたつた。日本武尊の血筋をひく御子が二人もおられ、

この妃をさしおいて皇后にという申し出には驚きがあつた。

足仲彦天皇は、一日として父を想わぬ日はなく、即位されると、諸国に令して、

白鳥を獲て、陵域の池に養おうとされた。ところが、これは妙な結末を迎え、

持ちつきの話となつた。越国から白鳥四羽が送られてきたのを、宇治川のほ

あしかみのかみのわけのみこ

とりで、異母弟の蘆髪蒲見別王が、「白鳥なりと雖も、これを焼かば黒鳥と爲

るべし。」と奪い去つたという。いい加減に父のことを忘れよということである

うが、怒つた天皇が王を殺してしまわれた。いつまでも日本武尊であるまいと

いう空気もあつたようだ。

この時代の婚姻は、政略上の重要な縁組であり氣長氏ならびに和珥氏との関

係を深めたいという思惑があつた。これは天皇のご意向であろうが、歴代大臣

を務める武内宿禰の進言があつてのことかもしれない。

たけしうちのみこ

足仲彦天皇は稚足彦天皇（成武天皇）に後継者がおられず皇太子と

たらしなかつひこのすめらみこと わかたらしひこのすめらみこと

なられたのだが、稚足彦天皇は父の大足彦忍代別天皇（景行天皇）が晩年に

おほたらしひこのすめらみこと

近江の志賀に高穴穗宮を置かれたことを受けて、近江の重要性を認識しておら

たかあなほのみや

れた。滋賀郡坂本村大字穴太（大津市穴太）である。穴太は各地にみられ穴穗が

その起源で、後に、室町、戦国時代に石垣積み（石工）として名を馳せるのであ

るが、元来は、鑄鍛や鋌山開発技術を有す渡来系の穴師である。

琵琶湖の東岸は早くから開けていたが、西岸の近江の志賀は、山背の重要性

をにらんでのこと、琵琶湖西岸（湖北航路）の持つ意味が大きくなりはじめ、

四つ谷川湖岸あたり（唐崎）に港を整備するのに動員されたのであろう。氣長氏

との連携を優先させたのは、そういう流れがあつた。

足仲彦天皇は、氣長足姫尊を皇后とされるや、驚いたことに、皇后及び百

おきながたらしひめのみこと

寮（百官）を引き連れて角鹿（敦賀）に行幸し、筒飯宮を設けられた。角鹿は、

つぬが

けひのみや

都怒我阿羅斯等訪問の地であつた。都怒我は金官加羅の最高官位号「角干」

つぬがあらひと

ツヌカ（シ）

で、阿羅斯等が名前となる。角鹿には、半島との窓口という響きがあつた。北

で、阿羅斯等が名前となる。角鹿には、半島との窓口という響きがあつた。北

陸は元来、大国主命など出雲系の強い地であったが、御間城入彦五十瓊殖天皇(崇神天皇)の世に、大彦命を北陸、その子武渟川別を東海の平定に派遣して以来、二人の子孫が入り込み、また大足彦忍代別天皇(景行天皇)の世に日本武尊が東国を平定し、帰還時に越に吉備武彦を派遣したことにより、吉備系も進出してきた。また、武内宿禰の祖父、彦太忍信命系の子孫も加わっている。丹波では、丹波道主命が平定に派遣されて以来(古事記は彦坐王とする)、その子孫が地盤を固めて来た。その時、西道(西日本)の平定を命じられたのが吉備津彦(彦五十狹芹彦命)であり、日本武尊の東征に、子孫の吉備武彦が加わっていた。

大彦命、武渟川別、彦五十狹芹彦命【亦名…吉備津彦命】、丹波道主命の系図

倭國香媛

倭迹迹日百襲姫命

彦五十狹芹彦命【亦名…吉備津彦命】

大日本根子彦太瓊天皇(孝靈天皇)

大日本根子彦國牽天皇(孝元天皇)

細媛命

大彦命 武渟川別

稚日本根子彦大日天皇(開化天皇)

鬱色謎命

彦太忍信命

伊香色謎命\*

\*伊香色謎命

姥津媛

彦坐王 丹波道主命

若筒木王 迦邇来雷王 氣長宿禰王

わかつらしひこのすめらみこと

これらの動きは、稚足彦天皇(成武天皇)の世に加速をしていたのであるが、筥飯宮に政権中枢が移行してくると、現実には、何かが変わっていると実感された。一体何が始まるのかと注視されていたところ、天皇は、淡路に屯倉を定められた。淡路は古くからの直轄地で狩場でもあるが、播磨、吉備、讃岐、紀伊を視野に入れる地である。それが終わると、天皇は、皇后と百寮を筥飯宮に置いたまま、二三の卿大夫と官人数百で紀伊に入り徳勒津に宮を設けられた。徳勒津は、名草郡新在家村(和歌山市新在家)の得津、紀氏の地である。

紀の国は、木の国、素戔鳴尊が韓(半島)より持ち帰った杉や檜を植林したとする地であり、古来より加羅や高句麗とつながりがあった。大足彦忍代別天皇(景行天皇)の時代に、紀国に派遣された彦太忍信命の子、屋主忍男武雄心命が、紀直の遠祖、菟道彦の女、影媛を娶り生まれたのが、武内宿禰である。



武内宿禰は大足彦忍代別天皇に仕えて功績を挙げ、稚足彦尊（成務天皇）が皇太子に立たれたとき、それを支える臣に任命されていた。この一連の動きを促進していたのは、後になって思えば、武内宿禰であった。彼は、氣長氏ならびに和珥氏との連携により、北陸、近江、淡路、紀伊というラインを強化し何かをしようとしていた。この時に、熊襲が背いたという知らせが届いた。

熊襲は大足彦忍代別天皇（景行天皇）の時代から背いており、天皇が九州に向かわれるに際して、「熊襲、反きて朝貢<sup>そむ みつきたてまつ</sup>らず。」と微妙な表現となっていた。朝貢しないという表現は、異国の属国のごとき扱いである。日本武尊が討伐をされたものの、どうやら何か一筋縄ではゆかない問題があり、火種がくすぶっていたようだった。

それはそれとして、実は、大足彦忍代別天皇が九州各地を巡行されたことで、瀬戸内の勢力との関係を新たにし、瀬戸内海航路を安定的なものにすることができていた。天皇は、徳勒津<sup>とくろつ</sup>からそのまま海路で穴門<sup>あなと</sup>（下関）に向かわれた。武内宿禰は紀伊、難波、淡路、播磨、吉備、讃岐、伊予などの海人と連携し、穴門への集結を目指した。

また、驚いたことに、角鹿<sup>つぬが</sup>（敦賀）の皇后にも穴門へ向かうようにとの使いがよこされた。正月に結婚し、二月に角鹿、三月に穴門へ向かう、全く目まぐるしい。天皇は穴門の豊浦津<sup>とよらのつ</sup>に六月にはお入りになるそうで、皇后には、日本海を回って豊浦に着くようにとのことである。何を考えておられるのか、豊浦で何をしようとされるのか、一体全体どこに都を定めようとしておられるのか。

倭<sup>やまと</sup>（奈良）の纏向<sup>まきむく</sup>が都であったが、大足彦忍代別天皇は都を離れることが多く、晩年には志賀に高穴穗宮をおかれ、稚足彦<sup>わかたらしひこのすめらみこと</sup>天皇もそこに居られることが多く、足仲彦天皇といえはこのありさまで、纏向がどうなることか。何かが変わり始めており、自ら住む宮が定まりそうもないこの皇后の人生に何が待ち受けているのか。

昭和生まれの私は、それを考えながら、いつのまにか、平成の世からこの時に迷い込んでしまっていた。

## 二、穴門の豊浦宮と熊襲

あなと とゆらのみや くまそ

氣長足姫尊は、このようにして、角鹿をお立ちになられた。淳田門は、若

狭三方郡常神岬と敦賀半島の先端、立石岬の間の海の潮が太く起ちうねるのを「ぬた」と称する潮の道である。そこは、平成の世では、チヌ、マダイ、イシダイ、クロダイ、グレ、イカ、アワビ、ウニ等の漁場である。そこで皇后が船上で食事を召しあがると、チヌが沢山集まってき、皇后が酒を灌がれると、チヌが酔っぱらって浮かび、海人がそれを喜んで取った。以降、この海域では、この季節になるとチヌがふらふらと浮き上がってくるようになったといわれる。けひのみや 箭飯宮にも残留の司を置かれるものの、主だった百寮を伴っての船隊での移動であり、和珥氏ゆかりの海人、海運力が動員されたものであろう、よき漁場をもって報われた。彦坐王の子孫が但馬や因幡を治めていた。

日本海側の部族には、箭飯宮から伝令が送られ、皇后一行に水や食料や木材などの物資を提供するよう令が出されたであろう。あの日本武尊の御子の皇后一行がお見えになる、有力豪族も皇后などにお目にかかるなど聞いたことも無く、顔を見合わせて何が起こるのかと噂した。

丹波では、後には再び、和珥氏の武振熊が治めることになるのであるが、

この時期、天火明命を祖とする尾張系の大倉岐命が治めていた。「勘注系図」の注によれば、大江山の大蛇を退治した功によったそうで、基本的には彦坐王、丹波道主命の系譜の治める地であった。

石見では、御間城入彦五十瓊殖天皇（崇神天皇）の世には、紀氏系の大屋古命が治めていたが、大足彦忍代別天皇以降には、物部竹子連が、これに取って代わっていた。

伯耆や出雲では、出雲系が勢力を有していたが、御間城入彦五十瓊殖天皇の時、出雲の神宝を献上させるために、物部系の武人を派遣したがうまくゆかず、出雲の内部を分断し、吉備津彦と武渟河別に、出雲振根を討たせ、臣従させたことがあった。しかし、この頃には、出雲系の勢力は、中央や東国への進出の機会を伺う動きとなっていた。

長門は、阿牟君（長門国阿武郡阿武郷・萩市）の始祖、日向襲津彦皇子の地。父

は大足彦忍代別天皇、母は日向髪長大田根、北九州から出雲に至る海域に睨みを利かすために、日向からこの地に派遣された御子と思われる。豊浦郡豊北町大字神田上に神功皇后神社がある。弥生時代の共同墓地跡で知られる土井ヶ浜遺跡の地、後の世のことであるが、蒙古の軍勢が土井ヶ浜に進攻の際、長門探題北条時直が神功皇后の神霊を斎き祀って戦勝を祈願し撃破できたという伝説がある。長門の深川では、皇后一行は、船の修理のため停泊され、その木材を調達された地を「板持」と称した。

各地の豪族達は一行を歓待されたことであろう。皇后はこの時はこれらの族との顔つなぎ、と好<sup>よしみ</sup>を交わされたのみであつたろうが、後に皇后を助けることになる。

七月になって、豊浦津にお着きになった。この時に、皇后は海中から如意珠、仏舍利から出た宝玉で、すべての願いがかなう玉を得られた。仏教も伝来しないこの時期に如意珠というのは解せない、この海域の海神に加護を得ておられるといたいのであろう。この時代、海神の怒りを得れば、航行はおぼつかない。日本武尊が相模の海の海神の怒りを受け渡ることが出来ず、弟橘媛が入水して怒りを鎮めるといふ犠牲を払われたことは、記憶に新しかった。九月には宮が完成し、穴門豊浦宮と称された。穴門豊浦宮跡は忌宮神社境内にある。

この忌宮神社には、古事記にも日本書紀にもない伝承がお祭りとして残されている。「数方庭祭」といい、「第十四代仲哀天皇の御代、この地に豊浦宮が置かれましたが、九州の熊襲を扇動して新羅の塵輪<sup>じんりん</sup>が攻め寄せてきました。大変な苦戦をさせられましたが、最後に仲哀天皇自ら弓を引かれ、敵の大將塵輪を打倒されましたので、賊軍は色を失って退散し、人々は矛をかざして旗を振って歓喜のあまり踊り廻ったといわれます。これが数方庭の由来とされます。」新羅が熊襲の背後にあり、この地方まで攻め寄せて来たという。

この先の話にすすめば、古事記、日本書紀においては、断じてありえない事態であることは明らかであるが・・・何故こういう伝承が残されているのか？ 実のところ、九州の熊襲を討つのに、この地に六年もおられたということも不可解なものである。ここより西に進むことができない事態があつたとすれば話は通る。その意味では、この伝承はうなづける。しかし、新羅はまだ辰韓の時代であり、時代が合わない。もう一つ、「蚕種渡来之地」の碑があり、「中国より秦の始皇十一世の子孫功満王がここ豊浦宮に滞在の仲哀天皇に蚕種（カイコの卵）献上し、我国養蚕の始まり。」とある。功満王というのも、後の時代に渡来してくる弓月君の父で、弓月君は太秦氏、秦氏の祖とされる渡来漢人である。この時代にもぐりこんだ私が、こんなことをいうのは妙なこともかもしれないが、おきながたらしめのみこと

氣長足姫尊ご自身が、時を飛び越えられることがしばしばある。

半島において辰韓という時代であるにもかかわらず、新羅に攻め込む、馬韓という時代であるはずが、百済の王と交渉をしておられる、江戸で黒船のペリーと交渉した足で、太平洋艦隊を率いて真珠湾攻撃の指揮をとっておられるようなもので、頭の中がごちゃごちゃになるとでもいえば分かっていただけないかもしれない。

キリスト暦という紀元前から紀元後に亘り、通年で歴史をみる時代に生きている人間にはありえない事態で、こんなおかしい皇后は捏造されたとする人が多いのはもつともなことだ。しかし、干支という世界に生きている人間は違う。干支は六十年で一巡するので、六十年、百二十年、百八十年後には同じ干支が



巡つて来る。ひよいと干支の上を移動すれば、一回りも二、三回りも時を乗り換えてゆける、とでもいえばなんとなく様子が分かつていただけのかもしれない。自分の父母や祖父母や曾祖父母くらいの時なら、それはおかしいとすぐ分かるが、三百年も前の事ならば、干支さえあっておれば、横滑りをしていても普通のひとには多分わからない。ましてや、わたしたちにとつては、千数百年前の話であり、それを見分けることはまず無理だ。

六年後（即位八年）の正月に、周芳の沙塵の浦に、筑紫の岡縣主の祖、熊鰐くまにという者がやって来た。九尋というから、どうやら十六メートルくらいの船であるが、舳先に立派な櫓をくくりつけ、上の枝に白銅鏡、中の枝に十握釵、下の枝に八尺瓊（玉）が掛けてある。おほたらしひこおしろわけのすめらみこと大足彦忍代別天皇（景行天皇）が熊襲征伐

に発たれたのも周芳の沙塵の浦であり、その時には、豊前の菟狹（宇佐）の神夏磯媛が同じように、上の枝に八握劍、中の枝に八咫鏡、下の枝に八尺瓊を掛け、亦、素幡を船の舳に垂らして、恭順の意を示し、一行を豊前に案内をするということがあった。どうやら武内宿禰等は九州における調略によく成功し、筑紫に巡行することができるようになったものとみえる。

ところで、娑摩（防府市の佐波）は、穴門の豊浦からすれば、随分と東にあたり、筑紫にゆく穴門から娑摩に引き返すというのは解せない。「数方庭祭」の伝承を考慮するなら、穴門は最前線であり危険があり、娑摩におられたと考えることはできよう。あるいは、多くの船を集めるには、娑摩の方が適していたということがあったのかもしれない。

熊鰐は穴門から向津野大済（宇佐市向野川下流の港）までを東門とし、名籠屋大済（新日本製鐵八幡製鐵所戸畑地区）、洞海湾への導入部となる港を西門とする海域の支配、更に周辺の島、洞海湾内の島、玄界灘沿岸の地を差し出すという。

没利嶋（六連島）・阿閉嶋（藍島）では穀物が栽培され、柴嶋（葛島、松ケ島、裸島、中臣島）では漁労と須恵器造りがなされ、逆見海（遠見ノ鼻「岩屋崎」の東の逆水池の海域）では製塩が行われていたようである。どうやら熊襲側よりは、天皇側に付きその下で働いた方が有利とする何らかの変化があったのだろう。これにより、北九州における拠点づくりのメドがたち、天皇一行は、熊鰐の先導により玄界灘側を山鹿岬より岡水門まで来られたのであるが、そこで船が進まなくなった。

熊鰐によれば、浦の口の、大倉主（男神）と菟夫羅媛（女神）の二神が通してくれないという。要するに、熊鰐はその海域と島を提供したが、二神は納得しておられないということになる。土地の神々は一筋縄ではゆかない。臍を曲げられるとにっちもさっちもゆかなくなる。倉「くら」は洞「くき」の転じたもので洞海の水神あるいは海神とみられており、菟夫羅媛は伝承がなく、伊勢

の津布良神社で、津布良比賣命が大水神の御子、土地の守護神とされており、水神あるいは地神と思われ、どうしてこの二神が一緒におられるかは不明であるが、待ったをかけてしまわれた。

天皇は自ら禱祈され、船頭であった倭国（奈良）菟田の人、伊賀彦を祝（神職）にして、懇ろにお願いをされた。菟田も伊賀も山の中、これが船頭というのも妙だが、元来海とは無縁の者が、遠征に従軍し、この六年の間に潮の流れをマスターするほどの働きをしていたとでもなるのか・・・日本の天皇に礼を尽くされれば、さしもの二神も船を止め置くことが出来なかったとみえる。伊賀彦は、岡垣の高倉神社の下社として作られた岡湊神社（遠賀川の河口）において両神とともに祭られている。岡水門は、かつて神日本磐余彦天皇（神武天皇）が東征に発たれたときに、寄港されたことがある。遠賀川流域は、旧石器時代からの遺跡が集中し、早くから農耕が行われた先進地域であった。この地の神の了解を得られたことは、天皇自らの徳とみなされたに違いあるまい。

一方、皇后は洞海から岡水門を目指された。昔は、洞海は岡水門へと通じていた。ところが潮が引き、船が進まなくなり、知らせを受けた熊鰐が舞い戻って来た。立ち往生した地というのは、弘川の鵜の巢付近、「魚鳥池」「魚鳥池の碑」「魚鳥池神社」のあたりとされ、高低差があり満潮でなくば船では通れない地であった。問題は、豊浦で授かった如意珠の効力がなかったことだ、豊浦の海神の力は、洞海では効かなかった。それで、皇后はいささかも立腹しておられたようで、熊鰐は一計を案じた。敦賀湾を出た立石岬の洋上にて、鯛を数多く集められた皇后のことである、熊鰐は魚鳥を聚めて皇后と遊んでいたのだ。皇后の心がなごむにつれて、大倉主も意地悪をやめて潮を満たしたのであろう。かくて天皇と岡津で合流された。

ところが、筑紫の伊観縣主の祖、五十迹手が、立派な榊の上の枝に八尺瓊、中の枝に白銅鏡、下の枝に十握釵を掛けて、穴門の引嶋（彦島）に迎えに参上していたという。「八尺瓊の勾れるが如くにして、以て曲妙に御宇せ、且た、白銅鏡の如くにして、以て分明に山川海原を看行せ、乃ち是の十握釵を提げて、天下を平けたまへ。」と奏上した。勾玉のごとくしなやかに治め、白銅鏡にうつるがごとくはつきりと世をご覧になり、十握釵を提げて天下を平らげ下さいと申しあげた。天皇は、五十迹手を褒め、伊蘇志といわれ、時の人々は、五十迹手の本土を伊蘇国と云い、それが訛って、伊観と云うようになった。そして、  
ながあがた 難縣に到りかしひのみや 檀日宮にお入りになった、という。

平成の世の人には、妙なことばかりが進行しているようだが、当時は、大真面目にそうしていた。千数百年後の人々が、平成の私たちの行動をみて納得で

きない部分を蒙昧な作り話と切り捨ててしまえばどうだろう、生きている我々の生活が干物のようにやせ細ってしまうことであろう。

五十迹手が彦島で天皇と合流しておれば、一緒に玄界灘側を航行してよさそうなものである。おそらくは、間に合わず、皇后と一緒に洞海から岡水門に向かったのであらう。本来なら彦島で奏上すべきであったことを、岡水門で申し上げたのかもしれない。

賢木（榊）は神域との境界をなす樹である。天の磐戸の前では、八坂瓊、八咫鏡、和幣の順で掛けた。素戔鳴尊との誓で天照大神が素戔鳴尊の十握劔から三女を生み、素戔鳴尊は天照大神の八坂瓊の五百箇御統から五男を生んだ。

伊奘諾尊が伊奘冉尊を死に導いた火神軻遇突智を斬るとき手にしていたのが十握劔であり、さまざまな境界の出入りを統御するものが八坂瓊の五百箇御統であった。この三つのものを奉じることが、自らの神域から天皇の神域に入ることとを表明したことになる。宇とは元来屋根を表す語であるが、その意味が拡大され領有、支配の及ぶことを意味した。

天皇は五十迹手の志を「いそし…勤し、よく勤めること」と褒め、その本土を伊蘇国とされ、それが訛って伊覩国となったとするが、伊覩国は実は魏志倭人伝の伊都国から来る。

魏志倭人伝では、伊都国について、「官を爾支（ニシ）といい、副を泄謨觚（セツモコ）・柄渠觚（ヒヤウキョコ）という。

千余戸あり。世々王あるも、皆女王國に統属す。郡使の往来常に駐まる所なり。」「女王國より以北には、特に一大率（いちだいらつ）を置き、諸國を檢察せしむ。諸國これを畏憚（いたん）す。常に伊都國に治す。國中において刺史の如きあり。王、使を遣わして京都・帶方郡・諸韓國に詣り、および郡（帶方郡）の倭國に使用するや、皆津に臨みて搜露し、文書・賜遣の物を伝送して女王に詣らしめ、差錯（ささく）（交わる）するを得ず。」とある。卑弥呼（ひみこ）の時代にあつて、かつての強國、奴國（なこく）を牽制する立場で、一大率が置かれ、一方半島や大陸との貿易を統御していたのが伊都国の位置であった。五十迹手が一大率に因んでいると考えるむきもある。この時代の五十迹手がいかなる勢力であったかは定かではないが、かつてはこの地域の諸國を檢察する力を有していた渡来系の族である。熊罴に次ぐ海運力を保持していたと想像される。いづれにしても、熊罴と五十迹手が天皇に恭順するということが筑紫巡幸を可能にしており、熊襲が半島と連携することを阻止する戦略の要でもあった。

かしひのみや

儼縣とはかつての奴国なこくである。後漢書に、「建武中元二年【西暦二〇二年】、倭わの奴國、奉貢朝賀す。使人、自ら大夫と稱す。倭國の極南界也。光武、印綬を以て賜う。」  
「漢委奴國王」の金印のことだ。また、「安帝【後漢の第六代皇帝】の永初元年【西暦一〇七年】、倭國王帥升等、生口百六十人を獻じ、見ゆるを請願す。」とある。かつては、後漢と外交關係を結んでいた先進国であり、衰えたりとはいえその感覚は残っており、熊襲というイメーজの後進性にまどわされてはならない。北九州の旧勢力の海洋性、外向性を十分考慮する必要がある。奴国の遺跡は現在の海岸線より内陸部に分布しており、当時はそのあたりまで海面が上昇していたと思われる。橿日宮は香椎宮の地、橿日は橿原を連想させ、天皇側が新たに名付けた地名とみるべきかもしれない。檜、橿、檮、檣、いづれも、常緑の大木。橿は「萬年木なり」とあり、日向の橘の小門の阿波岐原（檣原）とともに聖地である。橿原が中洲（奈良盆地）に進出する足がかりの地であったように、天皇政權が半島に進出する拠点となるべくして置かれた地に思える。それには、熊襲を牽制し、岡水門からの補給も確保される位置が必要であつた。

九月に、群臣を集めて熊襲討伐を議された。その時、神が皇后に託つてこう  
 申された。「天皇、何ぞ熊襲の服はざるを憂へたまふ。是、そしし 脊穴の空國ぞ。豈、あに  
 兵を擧げて伐つに足らむや。茲の國に愈りて寶有る國、譬へば處女のまよびき 睞の如  
 にして、津に向へる國有り。まかかやく 眼炎の金・銀・彩しろかね 色、うろはしきいろ 多に其の國に在り。  
たぐふすましちさのくに 是を袴衾新羅國と謂ふ。も 若し能く吾を祭りたまはば、曾て刃に血らずして、其  
まつろひしたが 國必ず自づから服また ひなむ。復、熊襲も爲服ひなむ。其の祭りたまはむに  
あなとのあたひ は、天皇の御船、及び穴門直、踐立の獻れる水田、ほむたち 名けて大田といふ、是等  
まひな の物を以て幣ひたまへ。」

贅<sup>あまつひ</sup>宍<sup>こひ</sup>の空國<sup>こほ</sup>とは皇孫<sup>にぎのみこと</sup>、天津彦彦火瓊瓊杵尊<sup>あまつひ彦彦火瓊瓊杵尊</sup>が降りられた日向<sup>そ</sup>の襲<sup>せ</sup>、背<sup>そ</sup>の肉<sup>し</sup>がない（瘠<sup>く</sup>せた）土地<sup>くに</sup>のことであるが、天孫降臨<sup>あまみこくだり</sup>の聖地<sup>よけ</sup>である。そこが熊襲<sup>くまざり</sup>の勢力下<sup>した</sup>にある<sup>あ</sup>ろ<sup>う</sup>が、そんな瘦<sup>く</sup>せた土地<sup>くに</sup>を取り返<sup>かへ</sup>すなど愚<sup>おろ</sup>の骨頂<sup>こつてい</sup>、捨<sup>す</sup>て置<sup>お</sup>いて、その國<sup>くに</sup>にはるかに宝<sup>たから</sup>の勝<sup>かち</sup>る國<sup>くに</sup>、海<sup>うみ</sup>の向<sup>むか</sup>ひの栲<sup>くさ</sup>衾<sup>きん</sup>新羅<sup>しんら</sup>國<sup>こく</sup>こそを得<sup>え</sup>よとい<sup>い</sup>ふ。栲<sup>くさ</sup>とは楮<sup>し</sup>の樹皮<sup>こ</sup>を蒸<sup>ゆ</sup>して幹<sup>こ</sup>からはがし、水<sup>みづ</sup>にさらして作<sup>つく</sup>る白<sup>しろ</sup>い纖維<sup>せんい</sup>、木綿<sup>もめん</sup>のことで聖なるもの、衾<sup>きん</sup>は「ふとん」のごときもの、皇孫<sup>みみこ</sup>は眞床追衾<sup>まゆき</sup>（玉座<sup>ぎよざ</sup>を覆<sup>おほ</sup>う衾<sup>きん</sup>）にくるま<sup>ま</sup>つて高千穗<sup>たかちほ</sup>峯<sup>みね</sup>に降<sup>くだ</sup>ろされたこと<sup>こと</sup>から分<sup>わ</sup>かるように、栲<sup>くさ</sup>衾<sup>きん</sup>は天<sup>あめ</sup>を享<sup>たの</sup>げるとい<sup>い</sup>つた表現<sup>ひょうげん</sup>といえよう。  
 睞<sup>まよびき</sup>とは眉<sup>まゆ</sup>を引<sup>ひ</sup>くこと、乙女<sup>おんな</sup>の眉<sup>まゆ</sup>の美<sup>うつく</sup>しさ、蛾<sup>が</sup>眉<sup>まゆ</sup>とは蛾<sup>が</sup>



の触覚の細長い曲線美を美女の眉に喩えたもので、三日月眉。海の向こうにそのような形の美しい国が見えるという。熊襲征伐などやめて、吾を祭れば、血を流さずとも、自ずと向こうから服してくる、熊襲もそれで服してくる、天皇の船と穴門の直、踐立からもらった水田を差し出して祭りを行いなさい。

天皇は疑いを抱き、高い岳に登り海の彼方をご覧になったが、海の向こうには何もみえない。天皇は神に、見渡してみるに海のみで、国などはない、大空に国が有るでなし、一体どちらの神でありましょうか。いままでお祭り申し上げてまいった神々のなかで祭り忘れている神でもいらつしやいましたか。と尋ねられた。

すると、神は皇后に託<sup>かか</sup>つてこう申された。「天津水影<sup>あまつみずかげ</sup>の如く、押し伏せて我が見る所の國を、何ぞ國無しと謂<sup>のたま</sup>ひて、我が言を誹謗<sup>そし</sup>りたまふ。其れ汝王<sup>いましみこと</sup>、如此<sup>かく</sup>言<sup>のたま</sup>ひて、遂に信<sup>う</sup>けたまはず。汝<sup>いまし</sup>、其の國を得たまはじ。唯し、今、皇后始めて胎<sup>はら</sup>みまして、其の子を獲たまひまします。」

天津は、「天の」、天の水にくつきりと影が映っており、従えるべく眼力で睨みつけているというに、それが見えないとは。それが信じられないならば、その国を得ることは出来ぬ。それはそれとして、今、皇后がはじめて胎<sup>はら</sup>み、その子を獲たり、と吉祥をも伝えたもうた。

しかし、天皇はこれもお信じになることが出来ず、熊襲討伐に発たれたが、勝つことができなかった。そして、翌年の二月に、痛身<sup>なやみ</sup>みたまふことがあると伏せられたまま崩御された。痛身は日本武尊が息吹山から居醒泉に辿り着いたときに覚えられたもの。「なやむ」は「萎ゆ」と同根で体力が衰えることであつた。

ある人は、天皇が神をお信じにならなかったためだと言ひ、ある人は、熊襲の矢に当たつてその傷がもとでみまかられたとした。

天皇が熊襲討伐について神託を求め琴を弾かれ、武内宿禰が庭に控えていたときのことという人もある。神は、そぼの皇后に託り先の言葉を申された。天皇は偽りをなす神と琴を押しやり弾くことを止められた。それを神は怒り、そういうことでは、天皇は天下を治めることはできないと申され、武内宿禰が天皇に、琴を弾いて最後まで神託を伺うよう促された。天皇が再び琴を寄せて弾かれたが、音が定まらず途絶えたかと思うと、その場にみまかられていた。驚いた武内宿禰がお祓いをして、神託を最後まで請うと、皇后に御子が授かり、その子が天下を治めると申され、それはどちらの子と武内宿禰が更に請うと、男子であると申されたという。

天皇が崩御され、皇后が身ごもつておられることは、秘された。皇后と武内宿禰は、「天皇の喪を匿<sup>しな</sup>めて、天下に知らしめず。」「しなむ」とは、おし包んでものを隠すことである。二人は、中臣烏賊津連<sup>なかとみのいかつのむらじ</sup>・大三輪大友主君<sup>おほみわのおほともぬしのきみ</sup>・



ものへのいくひのむらじ おほとものたけもつのむらじ  
 物部膽咋連・大伴武以連にこう令した。「今、天下、未だ天皇の崩りま  
 すことを知らず。若し百姓知らば、懈怠有らむか。」百姓は農民ではない、姓が  
 あり天皇に仕える諸々の氏族である。百姓が気を抜くようなことがあつてはな  
 らないという。

つかさつかさ ひき  
 「百寮を領ゐて、宮中を守らしめ、竊に天皇の屍を収めて、武内宿禰に  
 付けて、海路より穴門に遷る。而して豊浦宮に殯して、无火殯斂を爲す。」と  
 厳重である。

ほなし  
 无火はかがり火を焚くことなく、殯斂は魂があがること。物々しい警戒ぶり  
 であり、国内的にも対外的にも密葬が行われたことが漏れぬよう、慎重に執り  
 行われた。豊浦宮まで戻らねば安全が保てなかった。最前線での国君の崩御と  
 いう緊張感があり、大事件であつた。

その大事を取り仕切る四大夫として、中臣烏賊津連・大三輪大友主君・物部  
 膽咋連・大伴武以連が中洲(奈良盆地)ではなく筑紫の橿日宮にいた。中臣氏、  
 大三輪氏、物部氏、大伴氏の子孫が自分たちの祖先が半島への外交戦略を大き  
 く転換させた契機をここに求めたのであろう。皇后及大臣武内宿禰の決断のみ  
 ではなかった。

かつて、活目入彦五十狹茅天皇(垂仁天皇)二十五年に、五大夫に詔して、こ  
 う申されたことがあつた。みまきいりびこいにゑのすめらみこと  
 御間城入彦五十瓊殖天皇(崇神天皇)は粉骨碎身、身  
 を慎み、民は富み天下太平をもたらししたもの、神祇の祭祀が十分ではなく、  
 災いが起こつた。朕が世には、怠るところなきようにせよと。五大夫とは、阿倍臣  
あへのおみ  
 の遠祖、武渟川別、和珥臣の遠祖、彦國葺、中臣連の遠祖、大鹿嶋、物部連  
とほつおや たけぬなかはわけ  
 の遠祖、十千根、大伴連の遠祖、武日の五大夫である。この五大夫召集以来  
とをちね おほとものむらじ  
 のことであり、今度は北九州の地である。神祇の祭祀を怠れば災いを招くとい  
 う意識は、平成の人には縁遠いことであるが、当時の人々には教訓とされてい  
 った。ところで、最前線に重臣が集結し対策を練る、これは、北九州の熊襲を討  
 つたためだけに集結していたとは思えない。

皇后におかれては、天皇の死を傷む一方、自分に託された神の言葉が重くのし  
 がかつていた。一体どの神の言葉、どの神のご意向なのか。皇后が漠然と思つ  
 ておられることの先の先まで見透かしているようでもあり、おののいておられ  
 るようにもみえた。まずは、神に伺いをたてるに妨げとなるものを取り除き、  
 身を清められ、齋宮を小山田邑に造営された。

三月の吉日に、皇后は、齋宮に入り自ら神主となられた。なかとみのいかつのおみ  
 中臣烏賊津使主を喚め  
 して、審神者(神託を受け、神意を解釈して伝える者)とし、武内宿禰が、千繪高繪、  
さには  
 五色の刺繍による絵模様のある幣帛を琴の両端に立て、琴を奏し、七日七晩を

かけて、先に天皇に神託を告げられた神の名を求められた。

まず最初に、「神風の伊勢國の百傳ふ度逢縣の拆鈴五十鈴宮に所居す神、名なつきさかきいつのみたまあまさかるむかつひめのみこと」は撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命」と申された。撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命あらみたまは天照大神の荒魂である。荒魂とは災害や病氣や戦いをもたらす魂、和魂のつきさかきいつのみたま反、撞賢木嚴之御魂とは、櫛に憑く、撞くごとく威力のある魂、天疎向津媛命あまさかるむかつひめのみことは、天から遠く離れ港に向かう媛、氣長足姫尊（神功皇后）その人の未来を暗示するような名前である。これで、天皇がお信じにならなかった神が、天照大神の荒魂と判明した。

この神の他に神はいらっしゃいますかと問うと、「幡荻穂に出し吾や、尾田のあがたふし あはのこほりを 吾田節の淡郡に所居る神」と申された。幡がすすきのごとくなびくその先端ふつぬしのみことに出るというイメージからすれば、建布都神社の祭神、建布都神（武甕槌命）、經津主命といった軍神が合致する。阿波國阿波郡の建布都神社の祭神である。尾田については、倭姫世紀における伊雜宮の置かれた伊雜の乎田、あるいは志摩國答志郡の栗嶋座伊射波神社の次の栗嶋坐神乎多乃御子神社の乎多があはしまにましますいざはあり、栗嶋の栗を淡郡の淡、田節を答志とみ、この神を稚日女尊、天照大神の分身あるいは妹、とする。後をみれば、こちらの方が合致する。

また、他に神はいらっしゃいますかと問うと、「天事代於虚事代玉籤入彦嚴之あめにとしろそらにことしろたまくしりびこいつのことしろのかみ 事代神」と申された。天の事を知り、虚、天と地の間の事を知り、玉櫛姫に通そらい、神日本磐余彦火火出見天皇（神武天皇）の后となる姫蹈輔五十鈴姫命を生きさきまれた事代神であり、大國主神に国譲りを迫ったのが武甕槌命と經津主命、国譲りする他ないことを知りそれを勧めたのが事代神であった。この神がおられるいうことは、そうする以外に方法はないことを示唆している。武内宿禰は、事態が動かしがたいことに気付き、まだこれに与くみしている神が居られるはずであると思い、更に問うた。

「有無を知らず」と返ってきた。そこでどうしたことか、神の意を伝える審神者さにはたる中臣烏賊津使主が口を開いて問うた。今は駄目でも後ではどうかともちかなかとみのいかつのおみけると、「日向國の橘小門の水底に所居て、水葉も稚みなはに出で居る神、名はひむかのくに たちばなのをど みなせこ あ表筒男・中筒男・底筒男の神」と申された。水葉も稚に出で居るとは、海草のようになかなかしくて生命に満ちること。「みなは」であれば水沫。筒は中空のものである、水中の空洞、中に人を容れて渡す。水中の泡沫は呼吸を助ける。「つなかつつ」筒は星でオリオン座中央のカラスキ星、参星ともいうが、これを目印とし

て方向を知る、つまり航海を司る神である。

天照大神の荒魂、軍神、予知神、航海神、まだあるはずと問うてみたが、そこまで明かせば十分であろうとばかりに、お告げは終わった。

この神託は、主要な神々の意向であり、皇后は厳肅な面持ちで目を伏せておられた。避けて通ることはできないが、果たして、実現され得ることなのか、まずは、告げられた通りの祭りを行われた。

皇后は、試しに、日本武尊の東征に従軍し越こに向かった吉備武彦の子、鴨別かもわけを熊襲討伐に送りだされた。すると、熊襲の方から服従を申し出てきた。早速

神意が実現されたかのごとく思えたのであるが、荷持田村の羽白熊鷲のとりたのふれ はしろくまわしという者が従わないという。荷持田村は、肥前国高木郡野鳥(乃止利)郷(長崎県島原市)という人があるが、筑前国夜須郡秋月庄野鳥村(福岡県朝倉市秋月野鳥)の方が後の話とはつながりがよい。熊鷲というくらいで、力が強いのみならず、鷲であり、翼があり高く飛び回り、神出鬼没で物や人をかすめ取る。

驚いたことに、皇后自らが出陣して熊鷲を討つと言いだされ、檀日宮より松峽宮に移られた。妊娠されたはずの皇后である、何を考えておられるのか、

しかし、知っているのは武内宿禰たけしうちのすくねだけであつた。中臣鳥賊津使主なかとみのいかつのおみも気付いてい

たかもしれないが・・・神託が真まことであれば、熊鷲を恐れることはないのかもしれないが、女性としては、どうみても無茶な行動である。

松峽宮は、筑前国夜須郡栗田村(福岡県朝倉郡筑前町栗田)とされ、大宰府から南東、朝倉市の手前あたりである。その途中でつむじ風が起こり、皇后の笠が吹き飛ばされ、そこを御笠みかさと称した。筑前国御笠郡御笠郷(福岡県大宰府市御笠)である。鴨別の子孫に笠臣を名乗るものがあり、何か思い出深い事情があつたのだらう。

結局、層増岐野そそきので熊鷲を討ち滅ぶことができた。その時、皇后はよほど安

堵やすをされたのであらう。その地を安と名付けられた。層増岐野、野は平野部にかぎらず、耕作されない山野でもある。夜須高原のどこかかもしれない。あるいは平野とみて、筑前国夜須郡(朝倉市甘木)という人もある。朝倉郡夜須町は、北部の砥上岳(四九七メートル)の中腹に観音塚古墳があり、南部の花立山丘陵地には九州最大の焼ノ峠古墳(前方後円墳。国指定史跡)があり、熊鷲といかにも野蠻な名がつけられているが、本来は先進的な地域であつた。

安本美典氏の邪馬台国「朝倉説」の地でもある。なんでも中洲(奈良)と夜須町においては、「ほとんど同じ場所に同じような地名があります。たとえば、北の方に笠置山という山があり、春日というところがあり、三笠(御笠)山というところがあります。あるいは長谷であるとか朝倉であるとか、ほとんど同じような位置に同じ地名があります。これはいったい何を意味するのでしょうか？結論からいえば、これは北九州の邪馬台国勢力が東に移って大和朝廷をたてたさいに、もとの九州の地名を畿内に持つ

ていったんだとわたくしは思います。」ということとどちらが本でどちらが末か、考えさせられる。

皇后は、更に、山門縣に至りて、土蜘蛛田油津媛を討たれた。田油津媛の兄、夏羽が救援の軍を興したが妹が殺されたと聞いて逃げたともある。山門縣については、筑後国山門郡山門郷（福岡県みやま市瀬高町山門あるいは山川町）、邪馬台国ともされる地である。山門は門「と」が甲類であり、山が門のように塞がっている地、奈良（倭）同様の地形をさす。筑前、筑後、肥前、肥後、豊前、豊後の諸国にまたがる交通の要衝であり、筑紫平野を支配する強大な国が想定される地でもある。土蜘蛛で田油津媛、人をたぶらかすシャーマンとされているがどうであろうか。卑弥呼に連なるという説もある。「兄、夏羽、軍を興して」とあり、軍を興すというのは国単位を思わせ、田油津媛も女王クラスであってよい。ただ、熊鷹同様周辺との連携がとれておらず、個別に撃破されてしまった。

ここまでくると、大足彦忍代別天皇（景行天皇）の十八年、筑紫国の巡狩が蘇る。秋七月に高田行宮にお入りになった。長さ九百七十丈（約三キロメートル）の巨木が倒れたものを橋として、百寮、群臣、が高田行宮に詣で来ているとある。朝日に杵嶋山を隠し、夕日に阿蘇山を覆う巨木であったという。そのような木は無い、直線の長い路が整備されていたのであろうか。そこを御木国（歴木、三池町高泉）と称した。広範囲の地域から群臣が集う、あるいは、その地で従った豪族が結構いたであろう重要拠点であった。

皇后が行かれた山門縣は、高田行宮の北、八女縣から水沼縣に至る道中に当たる。水沼縣主は猿大海といった。水沼君は宇佐と同じく宗像三女神を祭る海人族安曇氏の系統である。猿大海は八女山中の八女津媛との友好関係を保ち、木を取引し、船を造り、有明海の海産物の海運に従事していたと思われ、土蜘蛛というイメージからほど遠い地域である。

ただ、これらの子孫は熊鷹や田油津媛、夏羽とは同調しなかった。かつては、中洲（奈良盆地）よりはるかに先進地域であり、隠然たる力を有していたのであろう。そして、女王の存在が非常に目立っていた。

足仲彦天皇（仲哀天皇）が新羅の国について全く無知であったとするも、意図的である。新羅の塵輪と戦ったとする伝承があり、橿日宮まで進出しながら、半島の情勢に全くの無知であるなど、幕末の江戸の将軍が海に向こうに何も見えない、米国などどこにもないと言うに等しい。奴国の王、卑弥呼も十分に半島の国、大陸の国を理解していた。

熊襲の背後に半島の勢力が関係していることは承知されていたとみるべきと思う。いかに神託とはいえ、北九州に来たばかりで、いきなり半島に出兵する



のは暴挙とみなして当然である。妙な喩えであるが、尊王攘夷もままならぬ状況にあって、幕末の將軍に薩摩や長州でなく、その背後の英国を討て、と神託が下ったようなものだ。足仲彦天皇のご判断こそ当たり前であり、この期にかような神託が下ったことこそ異様であつた。

その天皇の死を伏せて、御子を身おきなごもつたことも秘して、神託の真偽を確かめ確かめ、自ら半島に出兵する氣長足姫尊（神功皇后）、これが本当に皇后のご姿であつたのか、分らない。

半島を見据え政權を運営した女性といえ、卑弥呼である。私の頭の中で、二人の姿が入り交じりはじめていた。

#### 四、皇后の祈うけひ

四月になり、皇后は、山門縣やまとのあがたより北に向かい、火前國ひのみちのくちのくにの松浦縣まつらのあがた（肥前國松浦郡）に到り、玉嶋里たましまのさと（佐賀県唐津市浜玉町）の小河（玉島川）で祈うけひをされた。「うけひ」は神意を問うものである。

「朕、西、財の國を求めむと欲ほす。若し事を成すこと有らば、河の魚鉤飲へ。」皇后は自分の身につけていた針を曲げて釣り針にし、裳から糸を抜き取って釣り糸とし、飯粒を餌にして、石の上ののぼり釣りをされた。河魚が釣れば事は適う。竿を垂れると細鱗魚が掛った。珍しいものが獲れた、梅豆羅國、これが訛つて松浦となったという。この地では、以降四月に年魚を釣るようになった。魏志倭人伝において半島から対馬を経て最初に上陸する重要拠点であった末廬國である。

魏志倭人伝によれば、「また（壱岐國より）一海を渡る千余里、末廬國に至る。四千余戸あり。山海に浜うて居る。草木茂盛し、行くに前人を見ず。好んで魚鰈を捕え、水深浅となく、皆沈没してこれを取る。東南、陸行五百里にして、伊都國に到る。」という位置関係である。

この祈は、吉野の丹生の川に於ける神日本磐余彦天皇（神武天皇）の祈を彷彿させる。「吾、今、當に嚴瓮を以て、丹生の川に沈めむ。如し魚、大小無く、悉に酔ひて流れ、譬へば披の葉の浮き流るるが猶くあらば、吾、必ず能く此の國を定めむ。如し其れ爾らずは、終して成る所無けむ。」これが成ったことは、丹生の川神が磐余彦尊の中洲（奈良盆地）への進出を約束されたに等しい。土地の神を味方につけることが肝要であった。

皇后はこれによって、一段と深く神意を感じになられた。早速、神田を定めて難の河（那珂川）から溝を掘って水を引かれた。迹驚岡（福岡県筑紫郡那珂川町安德）にさしかかると大岩にぶつかり、武内宿禰を呼び、釵と鏡を捧げて神祇に祈らせると、落雷により岩が裂けた。裂田溝とされ、皇后は神意の動かし難いことを悟られたのであろう。

檀日宮に戻れると、檀日浦で更に、祈を試みられた。これは奇妙なもので、男に扮することができるとかというものである。「吾、神祇の教を被け、皇祖の靈を頼りて、滄海を浮渉りて、躬ら西を征たむとす。是を以て、頭を海水に滌がしむ。若し驗有らば、髪自づからに分れて兩に爲れ。」

髪が両方に分かれるとは髻みづらといい、日本武尊のごとき男性の髪型となること、男となることである。神は男装をして戦に臨むことを善しとされた。皇后は、神意を確信された。

昨年九月に妊娠されており、四月となれば、もう相当お腹が大きくなっておられる。それで、男になる、全くどういう神経をしておられるのか、平成の人にはほとんど理解はできない。フランスにもジャンヌダルクという男装の戦う女性が居られたが、身重の身であれば、どうであつたろうか。後でみれば分かるが、皇后は、御子を守ることに精魂を傾けておられる。流産を恐れるのが当然であらうに・・・

皇后が群臣に財たからのくに土を求めて兵を興すことを議された。「夫れ師いくさを興し衆を動すは、國の大事なり。安やすさも危あやうさも成り敗れむこと、必ふつに斯こゝに在り。今征伐うつ所有り。事を以て群臣まへつきみたちに付く。若し事成らずば、罪群臣つみに有らむ。是、甚だ傷いたしきことなり。吾婦女たをやめにして、加以不肖またをさなし。然れども暫く男の貌を假かりて、強あながちに雄をしき略はかりごとを起さむ。上は神祇の靈みたまのふゆを蒙り、下は群臣の助に藉よりて、兵甲を振おこして嶮浪たかなみを度り、艫船ふねを整へて財土たからのくにを求む。若し事成らば、群臣、共に功いさをし有り。事就らずは、吾獨罪有れ。既に此の意こころ有り。其れ共に議はからへ。」

天皇が議場いくさに居られず、身重の皇后が男装をして、神託には全く触れず、いきなり戦いくさを行い衆を動かすことは國の大事、戦の大義というか、前段の説明すらない。討たねばならないことがある。もし事が成らず、群臣に罪があるとなれば傷ましい。私は婦人にして不肖、だから男の姿をかりて、男のごとき計略を実行する。神祇の加護を得ており、群臣の協力があれば、その軍勢をもって高波を越えて、船隊を整えて宝の国を目指す。成功すれば群臣と共に功がある。成功しないとするとならひとえに私一人の罪である。そう決心をした。共に議されよ、という。

これに、疑問をはさむものはなかったようだ。群臣皆が申した。「皇后、天下が爲に、宗廟社稷くにいへを安みせむ所以ゆゑを計ります。且罪臣下またおのちに及ぶまじ。頓首つつしみて詔みことを奉うけたまはりぬ。」宗廟社稷、頓首などは中国の文章の引用であり、このあたりの言葉の進行は本当に知りたいことを伝えてくれない。かような説明では、普通では納得できまい。御子がおできのようでまことに慶ばしい、お祝い申し上げます。ときに天皇のお姿はないが、いかがなされましたか。宝の国とはどの国ですか、くらいはあつてよさそうだがなにもない。

群臣が、宗廟社稷を安んじるが故、頓首して承るということは何を意味しているのか。群臣の側にすでに受け入れるような状況があつたのではないかとす

ら疑いたくなる。実に不可解な気持ちになったものだ。

いずれにせよ、群臣は、否定はしないが、いささかも腰は引けていた。

九月になり、諸国に令を発して船舶を集めて練兵をしようとしたものの、兵が集まらなかった。皇后は、神のみに心を端を発するものとされたが、それだけでは集まらない。困った皇后は、御間城入彦五十瓊殖天皇（崇神天皇）の故事を

思い出されたのであろうか、大三輪大友主君の進言があったものか、大三輪社

を立て、刀矛を奉られ、国神の総帥、大物主神の協力をお求めになられた。大物主神は神託には参加しておられなかった。この神をお祭りすることにより、ようやく兵が集まったという。

中央の豪族は動かなかったものであろう、熊襲、ましてや半島への出兵という現実感希薄で、むしろ皇后が訪問をされた日本海側の勢力や武内宿禰が糾合した海人族、北九州のかつての勢力が功を挙げ、中央へ進出する機会と捉えていたようにみえた。

そこで、皇后は、吾瓮海人鳥摩呂を偵察に出したが、海に向こうに、国を見つけることができず、磯鹿の海人の草という者に代えると西北の方向にそれらしいものを見つけたという報告があった。吾瓮は阿閉嶋の「あへ」であり洞海の海人、磯鹿の草とは筑前國糟屋郡志珂郷（志賀島）、かの金印が発見された志賀の海人である。すでに見た如く、この地の海人は奴国の時代から半島、洛陽までを航海しており、半島の国の事を知らぬはずがない。あたかも、この時にはじめて見出し出したようなふりをする狙いは何であつたのだろう。

それは置いたとし、皇后は出陣の吉日をトわれた。驚いたことに、その日は、「適皇后の開胎に當る」という。御子がお生まれになる日であり、とても常識では考えられない神意である。まさに生まれなるとする子をお腹に宿している男装の皇后が「親ら斧鉞を執りて、三軍に令して」こう申された。

（余談であるが、中国では、親ら斧鉞を執りてとは、自ら將軍となること、天子六軍、諸侯三軍、大国の諸侯が三軍、氣長足姫尊（神功皇后）は大国諸侯並の軍を動かしたとなす。因みに一軍の兵数は12500人、三軍ならば、37500人のことである。）

「金鼓節無く、旌旗錯ひ亂れむときには、士卒整はず。財を貪り多欲して、私を懷ひて内顧みれば、必に敵の爲に虜られなむ。其れ敵少くともな輕りそ。敵強くともな屈ぢそ。則ち奸し暴がむをばな聽しそ。自ら服はむをばな殺しそ。遂に戦に勝たば必ず賞有らむ。背げ走らば自づから罪有らむ。」

孫子、軍争に曰く、「軍政に曰く、言、相聞こへず故に之を金鼓と為す。視、相見へず故に之を旌旗と為す。夫れ金鼓、旌旗は人の耳目を一つにする所以なり。」金鼓が節無くとはリズムが乱れること、そして、旌旗が錯亂すれば士卒は整はなくなる。財にめがくらみ自分の身内しか考えないとすれば、バラバラにされ捕虜と



なろう。敵が少なくとも侮るな、多くとも恐れるな。姦し暴することは許さない。服従するものは殺すな。戦に勝たば必ず賞を与える。背走すれば墓穴を掘ろう。これは孫子の口を借りたもので、皇后が申されたことではない。

次の言葉は、皇后らしい。「和魂は王身にきみたまに服みついでひて壽命みいのちを守らむ。荒魂は先鋒あらみたま さき

として師みいくさのふね 船を導かむ。」和魂は王が服を身にまとうように王をまとい、壽命

を守るであろう、皇后は身重まさに臨月の状態である。天照大神の和魂は憑く

がごとくにその子までお守りする。荒魂は先鋒として障害となるものを取り払

う。神がそう申しておられる以上、それを拜禮あやまふべし。依網吾彦男垂見を神主とし

て祭りをされた。依網は依網池の依網、東住吉区我孫子町、庭井町から大和川

の対岸、松原市天美町一帯。吾彦は我孫子あびこでもある。垂見は、播磨明石郡の垂

見たるみ（多留見）、依網、我孫子、住吉の出身で播磨に居た者が北九州に動員されて

いたことになるのか。

問題は、産み月である。皇后は石を腰を挟んで、子が生まれるのを押さえられた。事が終われば、この石の地で子を産むともいわれた。いかに神意とはいえ、産み月の女性が男装をして、船で海峡を渡って攻め込むとは、もう人としての限界をはるかに越えている。だから捏造だ、そのような人間はありえないと言っているではないかという声が聞こえてくる。まさに、これはありえないことだ。神話というものはそういうものだ、これは神話だ、という声も聞こえてくる。どうみても、これはありえない、じゃあ何故ありえたのか、解けない問題を

を出題された受験者のごとく、お手上げ状態に陥った。

五、未来へのワープか、過去への回帰か？

庚辰年冬十月に、船隊は和珥津わにのつを發ち新羅に向かった。庚辰年というのは西暦でいえば、紀元二百年、新羅では、第十代、奈解尼師今の治世に当たる。ところがどうもこの王の新羅に攻め入ったようではない。そのような氣配のあるところを新羅本紀に探ってみるといくつかみえる。

ただ、新羅本紀を含む三国史記は、金富軾きんぷしやく (1075～1151) が編纂したもので、依拠した古書が現存しておらず、日本書紀同様に古い部分はどこまで史実か分からない。年表の干支は中国王朝と三国一覽であり、中国王朝との関連がとれる三世紀以降は、書紀よりはあてになる。

奈解尼師今の十三年 (208 年) に、「夏四月倭人、境を犯す。伊伐飡いはつさん (新羅の官位制度の真骨〔第一番目〕のトップ) として (王子の) 利音を遣はし、将兵これを拒む。」というのがみえる。歴史的には、こういう官位制度が整い中央集権的な国家が形成されるのは、第十七代奈勿尼師今なこつにしきん (在位 AD356～402) 以降とされるので、この官位は疑われるがまあ、書紀同様、目をつぶっていたきたい。

第十一代、助賁尼師今の三年 (332 年) に、「夏四月倭人、猝にはかに至り金城を圍む、王親みづから出でて戦ひ、賊、潰走す。輕騎を遣はしてこれを追撃し、一千餘級を殺し獲る。」

第十六代、訖解尼師今の三年 (352 年) に、「春三月倭わの国王、使ひを遣はし、子の為に婚を求む。以て阿飡あさん (新羅の官位制度の六頭品〔第二番目〕のトップ) の急利むすめの女これを送る。」

第十八代、実聖尼師今の元年 (402 年) に、「三月倭国よしみと好を通ず。奈勿王の子、未斯欣みしきんを以て質と為す。」とある。

皇后が、新羅で人質とされるのは、実は、奈勿尼師今の御子である。どうやら、干支でいえば、三つほど (百八十年) 以上先のこと、つまり、皇后の船隊は、未来の新羅へと船出をなされていた。

未来に船出できるということは、現在の身重も問題にならなかったはず。時空の海を航海するのであるから、宇宙戦艦ヤマトじゃないが、ワープである。

紀元二百年ならば、海の間は弁韓べんしんくや、弁辰狗邪國、狗邪韓國と称される国である。「土地は肥沃で五穀と稻を種し、養蚕かとりで縑 (絹の一種) 布を作り、駕牛馬に乗り、嫁娶禮俗があり、男女の別が有り、大きな鳥羽で死者を送る (死者が飛んでゆけるように)。鐵てつを産し、韓かん、濊わい、倭わ、皆これを取る。中国のように錢を用いて買う。歌舞飲酒の俗があり瑟しつもある。編せまい頭で、男女、倭に近く、文身 (入墨)、步戰、兵仗 (兵器) と馬は韓に同じ。行き交うものの皆道を譲る。王がおり、衣服絜清 (清潔)、長髪、また廣幅細布を作り、法俗は特に嚴峻。弁辰、辰韓共に、雜居、城郭が有り、衣服・居

處、言語法俗は似ており、鬼神を祠祭し、異（靈）有り。施灶（オンドルのことか？）皆、戸が西に在る。瀆盧國（巨濟島あたり？）と倭が界を接する（三國志 魏書 東夷傳 弁辰）」

和珥津は対馬北端の対馬市上対馬町鰐浦、当時の対馬といえ、「郡（樂浪郡）」より倭に至るには、海岸に循したがって水行し、韓國を歴へて、乍あるいは南し、乍あるいは東し、その北岸くや狗邪韓國に到る七千余里。始めて一海を度わたる千余里、対馬國に至る。その大官を卑ひく狗くといひ、副を卑奴母離ひなもりという。居る所絶島、方四百余里ばかり。土地は山險しく、深林多く、道路は禽鹿の径の如し。千余戸あり。良田なく、海物を食して自活し、船に乗りて南北に市羅してき（交易）す。（魏志倭人伝）列島の倭王といえ、女王卑弥呼であり、おきながたらしひめのみこと氣長足姫尊（神功皇后）の姿などは何処にもない。もし、居られるならば、タイムマシンを駆使しておられたことになる。もし、居られるならば、日本書紀の編者達も、古事記の編者もそんなことは百も承知で話を展開しておられる。ただ、タイムマシンもワープもご存知ではない。だが、歴史的には成立しないことは十分分かっておられた。

時空の航海の様は、「時に飛廉かぜのかみは風を起し、陽侯うみのかみは浪を擧げて、海の中の大魚おほいを悉ふつくに浮みふねびて船たすを扶たすく。則ち大きな風順おひかぜに吹ほつきて、帆船波ほつに隨したがふ。櫓楫かちかひを勞いたつかずして、便すなはち新羅ふななみに到る。時に船潮浪隨ふななみひ、遠く國の中に逮みちおよぶ。即ち知る、天神地祇あまつかみくにつかみの悉ふつくに助けたまふか。」とある。飛廉ひれんは風伯ふうはく、頭が雀に似ていて一對の角がはえ、からだは鹿、尾が蛇のようで、豹のような斑がある中国の風の神。陽侯ようこうは、「もともと諸侯であつたが、罪を犯したため川に身を投じて自殺し、死後に大波の神になり、黄河の水神である河伯の配下：蛟竜と共に波浪を起す」とされる。皇后一行が、中国の天神地祇、飛廉、陽侯に守り助けられ、帆を付けた船隊が大きな順風を受けて、舵を使う労もなく、新羅の國の奥深くまで進む、これにはたまげた。飛廉、陽侯は、ものの例えで言つたまで、と言ひ訳して済むものではあるまい。天照大神の荒魂の激怒をかわぬかと冷や汗がでた。

すると驚嘆した新羅の王が、「新羅の國を建てしより以來、未だ嘗も海水うしほの國のほろに凌よのることを聞かず。若し天運盡きて、國、海と爲らむとするか。」つまり、東日本大震災で津波が襲つてきたような状態を想像すればいい。言い終わらぬうちに、大波の後ろからやってきた船団が海に満ち、旌旗日に耀き、太鼓笛が鳴り響き、山川が振動した。何だか中国三國志、赤壁の戦いを思い浮かべる。王が望見するに予想できぬ数の兵であり、國が滅びる危険を覚え、はつと思ひ出した。これは普通の兵でなく、かの東の神國、日本やまとの聖王、天皇の神兵であり、到底防ぐことはできぬ、と白旗をあげて降服の意を示した。まるで、アニメかCG映画、フィクションの世界、願望の世界である。

王は白い綬（印綬）を頸にかけて、両手を後ろに縛り顔を前に向けて、頭を地に垂れて服し、土地の図面と人民の籍に封印し、差出し、こう述べられた。「今より以後、長く乾坤に與しく、伏ひて飼部と爲らむ。其れ船柂を乾さずして、春秋に馬梳及び馬鞭を獻らむ。復海の遠きに煩かずして、年毎に男女の調を貢らむ。」則ち重ねて誓ひて曰す、「東にいつる日の、更に西に出づるに非ずは、且阿利那禮河の返りて逆に流れ、河の石の昇りて星辰と爲るに及るを除きて、殊に春秋の朝を闕き、怠りて梳と鞭との貢を廢めば、天神地祇共に討へたまへ。」

乾坤に與しくとは、天地を共にして、同じ天の下で、飼部という部民の役割を果たすという。日本には良い馬がなかった。舵を乾かさずとは、長い航海をしても、春秋に馬を運ぶ、梳（毛を洗うハケ）と鞭のみを献上したわけではない。古墳中期頃から馬具の副葬品が多くなる、馬への関心が高まっていた。年毎に男女を貢ぐともある。新羅は美女で名高い国であった。天地がひっくり返らない以上、これを怠ることはない。もし、そうであれば、日本の天神地祇の罰を受けましょう、と臣従を誓った。

王を殺すべきという声があつたが、皇后は、服する者を殺さず、縛を解き、王を飼部とし、国に入り、「重寶の府庫を封め、圖籍文書を收む。即ち皇后の所杖ける矛を以て、新羅の王の門に樹てる。」この矛は日本書紀編纂時にも新羅の門にあつたという。身重の皇后の姿を感じさせるものは一切ない。

「新羅の王波沙寐錦、即ち微叱己知波珍干岐を以て質として、仍りて金銀彩色及綾羅縑絹を齎して、八十艘の船に載れて、官軍に従はしむ。

是を以て、新羅の王、常に八十船の調を以て日本國に貢る。」微叱己知波珍干岐は、第十七代、奈勿尼師今の子、未斯欣であつた。

かくて神意は実現された。

「是に、高麗、百濟、二の國の王、新羅の圖籍を收めて日本國に降りぬと聞きて、密に其の軍勢を伺しむ。則ちえ勝つまじきことを知りて、自ら營の外に来て、叩頭みて款して曰す、「今より以後は、永く西蕃と稱ひつつ、朝貢絶たじ。」故、因りて、内官家屯倉を定む。是所謂三韓なり。皇后、新羅より還りたまふ。」

高句麗を高麗とし、百濟と二国も皇后に朝貢を約し、皇后は、屯倉を定めた。



三韓を新羅、高麗、百濟とするが、通常は、辰韓、馬韓、弁韓で高句麗は入らない。まあ、Back to the future、見た者はいないのであり、願望の言いたい放題。新羅の王や高麗、百濟の王から発せられる言葉の出どころは、何か変だなあと思えば、大抵は中国の史書、視て来たのは、現場ではなく、ここでは漢書、高帝紀、顔古師注、状況に合わせてひねってはあが・・・

皇后はかくて新羅より還つてこられたのであるが・・・新羅の王子が日本へやまとの人質となられたという話は歴史上の話である。臨月の皇后が、本当に新羅に行かれたのか、疑問とした。しかし、そもそも皇后が卑弥呼の時代におられることがおかしなことで、実は、本来は別の時におられ、卑弥呼の時代に送りこまれ、そこから未来へワープされ、再び卑弥呼の時代に戻されておられる・・・だから、皇后は三つの時を往来しておられたのかもしれない。

先を急ぎたいが、少し寄り道をしたい。書紀には、事がおわってから、ぽろりと違つた話を漏らすことがよくある。かの、神託は、ある人によれば、沙摩縣主さばのあがためしのおや、うつひこくにひこまつやたねおやの祖、内避高國避高松屋種に託りて、天皇に誨えたものだという。「うつひこは顕祭の語に由来し、神おろし、神託にかかわる語であり、その道に秀でた者であつたようだ。宝の国を得たければ授けましよう、皇后に琴を奏すようにとのことで、皇后が琴を奏すると、神が皇后に託つて申されたという。天皇が所望される熊襲は鹿の角の中に実がない国、天皇の船と穴戸直踐立が献上された水田を幣まひなひにして吾を祭るなら例の美女のまよひき暁のごとき国を授けるといふものであつた。

この人によれば、天皇がどこに国があるか疑われたことまでは同じ、一歩すすめて、一体どちらの神か問われ、表筒雄、中筒雄、底筒雄、海神であり、重ねて問うと、向置男聞襲大歴五御魂速狹騰尊むかひつをもおそほふいつのみたまはやさのぼりのみこととの答えを得ておられた。長つたらしくわかりづらい神名であるが、撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命が天照大神の荒魂であり、三海神の荒魂とするようだ。しかし、棺に向かい麻裳を広げて覆うイメージがあり、生死を司るような不気味さがある。

天皇が「聞き悪き事の言ひ坐す婦人か。何ぞ速狹騰と言ふ。」と皇后に申されたことからすれば、男神ではなく女神であり、三海神の荒魂ではなさそうだ。天皇もご不快であられた。天皇が宝の国を得られず、皇后が懷妊されたことも告げられたことは同じだが、その夜に、天皇が「はやのぼり」、みまかられたとする。まるで、天皇をお迎えに来られた神のようである。

この話では、皇后が男装して新羅を討たれたことも同じであるが、対する

新羅王を宇流助富利智干しらきのこきし うるそほりちかとしてゐる。第十二代、沾解尼師今てんかいにしきんの三年(259年)に、「夏四月、倭人、舒弗邯すぶらかんの于老うるを殺す。」とあり、新羅側では、この于老のことで新羅の王ではないとする。舒弗邯は伊伐飡いばつさんの別名、真骨の第一で、奈解尼師今なかいにしきんの子であり王族ではあった。三国史記「列伝」の「于老」によれば、沾解尼師今てんかいにしきんの七年(253年)に、「于老が倭国の使臣の葛那古かつなこと戯言を交わし、汝王を塩奴えんぬ(塩を焼く奴)、王妃を爨婦さんふ(飯炊き婦)にするぞと言ったことが、倭王に聞こえ、倭王は將軍、于道朱君うちしゆ?を派遣して于老を討ち、于老が不慎を詫げるも聞き入れず、柴の上で焼き殺した。味鄒王みすおう(第十三代味鄒尼師今)の時、倭国の大臣が招かれて来たおり、于老の妻が王に請うて倭の使臣を饗応し、泥酔させて庭に引きずりおろし焼き殺した。倭人が怒って金城を攻めたが、勝てずに引き返した。」、ともある。

倭人と新羅国成立以前の新羅(辰韓)との人の往来は、平成の人が想像する以上に頻繁なものがあつた。ここでは対立しているものばかりを取り上げたが、その関係は決して悪いものばかりではない。新羅の建国に際して、辰韓の瓠公ひょうこうが、馬韓との難しい交渉をまとめたと言われるが、瓠公は渡来してきた倭人であり、そういった倭人は、瓠公ばかりではなかつた。日本に七つの宝をもたらし、天日槍あめのひやりにも明らかなごとく、新羅は、皇后の母方の祖先であり、一種の憧れでもあつた。

姓氏録、右京皇別に、真野臣ひくくにながという滋賀の真野の氏族がある。和珥臣おおくたみのみことの遠祖、彦國葺なにはのすくねの後の大日納介おほやたのすくね、難波宿禰、大矢田宿禰とあり、大矢田宿禰が氣長足姫皇尊(神功皇后)に従い新羅を討ち、凱旋する日に、留つて鎮守府將軍と為つた。そして、国王の女むすめ、猶楊いうたふを娶り、二男、兄は佐久命とりむだいしおしかつ、次は武義命むげのみことをもうけ、佐久命の九世の孫、和邇部臣馬、務大肆忍勝等、近江国の志賀郡の真野村に住み、真野臣の姓を名乗つたという。

皇后や和珥氏にすれば、新羅は、その王子が祖先として渡来した国であり、ある種の敬意があり、友好関係を結ぼうとしていたとしてもおかしくはない。また、新羅側の一連の記録をみれば分かるように、皇后の時に倭国が一举に鎖国を破つて半島を襲つたという筋立てには無理がある。

しかし、この遠征で両国の関係は悪化した。ある筋によれば、それは皇后の遠征とは異なるという。この遠征の話の後にあり、その延長の話ととりちがえそうになるが、別の話である。先の于老うると大矢田宿禰の話の裏話のごときものである。書紀によれば、

新羅の王を捕えて浜辺で足の筋を斬り、腹ばいにさせ、最終的に斬り殺し砂に埋め、部下の一人を新羅の宰相にした。ところが、新羅の王の妻には、その

場所すら知らされなかったという。王の妻は、秘かに、宰相を誘い、王の埋められた所を教えてもらえらるなら、あなたの妻となつていいとささやいた。宰相は、これを真に受け、こっそりとその場所を告げたところ、王の妻と新羅の国人が、共に謀つてこの宰相を殺してしまい、王の屍を出して別の所に葬った。その時に、宰相の屍を王の墓の土の底に埋めて、王の棺をその上に据えて、尊い王の下に卑しい宰を埋めるのが順序である、と王の妻が吐き捨てた。これを聞いた天皇、皇后ではなく天皇とある。ここで天皇とあれば、足仲彦天皇（仲哀天皇）とせざるを得ないが、死せる天皇を生き返らせるなどはありません、途方にくれる。これに激怒したいづれか、天皇が、大軍をもつて一気に新羅を攻め、軍船で海を満たした。新羅の国人は、ことごとく恐れてどうしてよいかわからなくなり、寄り集まつて謀り、王の妻を殺して謝罪した、という。どの話を信じてよいのか分からない。だが、皇后以外の天皇が新羅へ遠征された可能性があり、あるいは、皇后が行かれなくとも新羅と日本の間の紛争が起こつていたことは確かであろう。

さて、寄り道はそろそろ終えよう。熊襲の背後に新羅の影があつたことはすでにみた。皇后や和珥氏の意向はどうであれ、四世紀の後半には新羅と日本の関係は悪化していた。こういうものをみるにつけ、私は、皇后が紀元二百年ではなく、後の四世紀の世におられる方が自然と思えるようになっていた。

## 六、天下分け目の戦い

皇后がお帰りになったのは、十二月、前年の九月に神託で受胎を告知され、九月に臨月を迎え、鎮懷石により十二月まで出産を遅らせることができた。その出産の地を宇瀾うみ（福岡県糟屋郡宇美町）という。

御子をお生みになられたことは、どうやら内々のことで、祝賀の宴のようなものもなく、どうしたことかといふかつていたのであるが、皇后に神からお告げがあったということで、そのことに話題が移ってしまった。

実は、波を起こして皇后の船隊を導いたのは、表筒男、中筒男、底筒男の三神だった。「穴戸直踐立あなとこのあたひむたち たてまつが所貢れる水田、名が大田を幣おほたまひなひにして、能く我を祭いははば」と皇后に託かられたのは、この三神であり、その荒魂を穴門の山田邑（下関市の長門国一宮住吉神社の地）に祭ることを求めてこられた。皇后の軍船を誘導して

功があつた津守連つむしの祖、田裳見宿禰たもみのすくねの進言があり、皇后は、早速、神田を定め、踐立を神主として三神を祭られた。

津は港であり、筒つつに起因するものに、彦火火出見尊ひこほほでみのみこと（山彦）を籠に入れて海底の海神豊玉彦とよたまひこの宮に導いた塩筒老翁しほつつのをぢ（鹽土老翁）、船の帆柱をたてる筒穴つつあな（船玉神）、夕星ゆうつづ（金星、あるいは、オリオン座のカラスキ星（参星））、対馬の豆まめ（安曇系海人の拠点）がある。対馬の松崎神社（多久頭魂神社摂社・対馬下県厳原町大字豆殿）は磯良神を祭り、磯良（安曇磯武良）は皇后の伴（水先案内）をしたという。

見方を変えれば、皇后は功績のあつたこの地の海人の神に報い、この地の海人達を固くその味方に引き入れてしまわれたともいえる。

二月になると、皇后は、群卿及び百寮を率いて、穴門豊浦宮とよらのみやにお移りになり、天皇の喪と、御子がお生まれになったことを公にされ、海路で倭やまと（奈良）の纏向まとむくへ向かわれた。ところが、麿坂王かじさか・忍熊王おしくまには、天皇が崩御されたことも、皇后が海を越えて新羅を討たれたことも、皇子がお生まれになったことも、正式には知らされていなかったようであり、これには私も耳を疑った。そのようなことで、国運をかけるがごとく新羅遠征がどうしてできたのか？

武内宿禰たけしうちのすくねと中臣烏賊津連なかとみのいかづのむらじ・大三輪大友主君おほみわのおほともぬしのきみ・物部膽昨連もののべのいくひのむらじ・大伴武以連おほとものたけもつのむらじ以外には緘口令が引かれていたのだ。纏向では、天皇と皇后が熊襲征伐に発たれてすでに八年、穴門から檀日にまで進出をされたことは分かっていた。兵を募つて水兵を訓練していることは聞かされていたものの、まさか、天皇が崩御され、皇后が勝手に海を越えて半島に遠征されたことなど思いもよらなかった。

それに、長きに亘つて、天皇は御子を成してはおられず、もうお生まれにはなるまいと思つていたところ、天皇は崩御されているにもかかわらず、御子がお生まれになっている。本当に天皇との間の御子であるのか、疑うと同時に、



もし男児であれば、皇位継承権が麿坂王・忍熊王から御子に移る可能性もあると衝撃が走っていた。

だから男児と分かるまで、皇后は、ひた隠しに隠しておられたのだ。男装とはそういうことだった。私もやっと事態が飲み込み始めた。皇后と武内宿禰と重臣が秘かに、日本の進むべき方向を転換しようとしていた。一種のクーデターである。男児を得て、皇后の決意が固まったのだ、と私は直感した。同時に、そんな皇后が流産を起こすような危険を犯されるはずはないとも直感した。

麿坂王・忍熊王の反応は早かった。「今、皇后、子有します。群臣皆従へり。必ず共に議りて幼き主を立てむ。吾等何ぞ兄を以て弟に従はむ。」と皇后一行が纏向に戻る前に事を決するべく、播磨に行き、赤石（明石）に天皇の陵を造ると称して、淡路島の石を運びながら陣地を造り、兵器を持たせ、待ち伏せた。

播磨は日本武尊の母の播磨稻日大郎姫の地、讃岐と伊予には日本武尊の東国遠征に副将として従軍した吉備武彦の女との間の御子、武卵王と十城別王が居られた。

尊は、熊襲征伐の帰還時に、吉備の穴海、そして、難波に至る柏濟で悪ぶる土地の神々を平定された。吉備穴国といえ、後の備後国安那郡・深津郡、福山市の芦田川の河口あたり、柏濟は難波の淀川河口付近の船着場、瀬戸内海航路の要衝を押さえておられた。

麿坂王・忍熊王は、吉備から播磨、難波にかけて、海峡の双方から皇后一行を攻めることができた。

犬上君の祖倉見別と吉師の祖五十狹茅宿禰とがこれに合流をした。倉見別の父、稻依別王は、日本武尊と兩道入姫皇女の長子、足仲彦天皇の兄で、犬上（彦根と近江八幡の間）や建部（瀬田）の族の祖となり、若狹を治めておられた。長子でありながら、天皇となられなかった事情が伏せられているが、日本武尊の嫡男の息子が第二子の息子達に加勢された影響は大きかった。

吉師は新羅十七等官位の第十四「吉士」に起源があるとも、難波吉士、草香部吉士その忌寸となった難波忌寸、吉志など、大彦命の後とされ、五十狹茅という名も大彦命の系統を示しており、いずれにせよ、難波を拠点とする海人である。新羅の王子、天日槍を祖とする和珥系に押されていたが、かつての四道將軍、北陸を平定した大彦命の後といえ、名門である。

日本武尊の血を引く勢力が結集して、東国に号令を発して兵を興せばたまらない。麿坂王・忍熊王が倉見別と共に、あの日本武尊を御旗に挙兵を促せば、打てば響く、最強の東国の兵が合流すれば、一挙に優位に立つ。尊の草薙剣を奉じる尾張の熱田から檄が飛ばば呼応する族は多い。尾張、美濃、伊勢には、

尊に従って熊襲征伐にでた射手の一団があった。白鳥も焼けば黒鳥と言って殺された蘆髪蒲見別王は相模国鎌倉、伊勢国桑名、陸奥国岩代、宇多、日理（宮城・福島）の太平洋沿岸）の祖という。播磨・讃岐・伊豫・安藝・阿波などには、蝦夷等から連れてこられた武芸に長けた族が、佐伯部として配されていた。

あとは神意が如何なるものか、麿坂王・忍熊王は祈狩をせむと菟餓野（撰津国雄伴郡宇治郷…神戸市灘区あるいは兵庫区）に出られた。よき獲物を得ることが出来れば、神意は可となる。ところが何としたことか、狩りに出る前に、棧敷に居られた麿坂王が赤き猪に襲われ喰い殺されるという不祥事が起こった。獲物を得るどころではない、それを耳にした前線の兵士達は恐れて動こうとしなくなつた。神は何を怒っておられるのか、思い当たる節は無い。兄を失つた悲しみと暗澹たる気持ちのなかで、倉見別に、どう考えても見当がつかないが、神意は凶、ここで戦うことはできぬ、と兵を引かせ住吉に後退をされた。

一方、皇后のもとには、忍熊王が兵を興し一行を待ち伏せているとの伝令があり、緊張しておられたが、事件を聞き播磨まで船を進め、そこで御子の安全をはかるため、武内宿禰に預け海を南下、紀伊水門に向かわせた。一方、自らは難波へと向かわれた。ところが皇后の船は前に進まず、務古水門（撰津国武庫郡武庫郷、武庫川河口付近あるいは、西宮市松原町、津門住江町付近）に引き戻されてしまった。この時代は海岸線がかなり内陸部にあり、武庫川は洪水で流れが移動しがちであり、水門の場所が定め難い。前に進まなくなつたのは、潮を読み違えたものではなかった。

神々のお告げがあった。天照大神が、「我が荒魂をば、皇后に近くべからず。當に御心をば廣田國に居らしむべし。」と申された。天照大神は、自らの荒魂を皇后から離し、広田國に置くように指示された。戦にはやる心を難波に持ち込むなということであるが、新羅を攻めた荒魂を鎮めることのみではあるまい。國を開くことを求めた神託は、皇后に連なる群臣には明らかとなつたものの、それ以外には、預かり知ることができぬものであつた。この地の勢力にも分かるよう、ここで神意を顯す必要があつたのかもしれない。広田國は、撰津国武庫郡広田神社（西宮市大社町）の地である。

撰津風土記、美奴売松原の条に、息長足姫尊（神功皇后）が筑紫に幸されるとき、諸神祇が松原に集まつたとある。美奴売の神は、自分の住む山の杉を皇后に献じ、皇后は還幸に際して、この神を美奴売の浦に祭り、船もその神に献じられた・・・これでは皇后は日本海ではなく瀬戸内を穴門に向かわれたことになる。それは置いたとし、忍熊王が早々に播磨に陣地を築かれたごとく、王の方が優勢な地域であり、神は先を急ぐより、味方を増やせと告げておられた。

皇后は、山背根子の女、葉山媛を以て祭はしめられた。根子は神主、神主はその土地の王でもあつた。つまり山背國の王、山背の勢力が同行していた。山

背根子は、天御影命第十一世孫とされ、天御影命は渡来系の鏡の製作者であり、御影（東灘区）に通じる。

次に、稚日女尊（天照大神の妹）が、活田長峽國に居りたいと申され、これをうながみのいさち海上五十狹茅を以て祭はしめられた。稚日女尊とは、「幡荻穂に出し吾や、尾田の吾田節の淡郡に所居る」神であつた。「幡荻穂に出し」とは、新田開発を行い、多くの稲穂に現れるともされる。姉は広田、妹は、活田、生田であり、生田神社の地（神戸市中央区下山手通）。長峽国とは、山と海に挟まれた土地の美称。海上五十狹茅は、五十狹茅宿禰の子であり、父と子は敵味方と別れたことになる。

次に、事代主尊が長田國に祠れと申され、葉山媛の弟（妹のこと）長媛を以て祭はしめられた。予言を司る事代主尊を長田神社の地に祠らば、預言は実現される。中国では、祠は犠牲を用いず圭壁及び皮幣を用いる、春の祭を祠といい、品物少なくして文詞多きなりとある。祭は犠牲を用いる、祀は自然神をまつるのが原義である。我が国ではそういう厳格な用い方はしないが、文詞多きは事代主尊にはピッタリする。

次に、表筒男、中筒男、底筒男の三神が、その和魂を大津の渟中倉の長峽に居さしむべし、往來ふ船を看さむ、航行する船の監視をなさると申された。荒魂は穴門で既に祭られた。大津は大きな港、美奴売の浦の泊りがあつた。渟中倉、「ぬ」は濡れた、どろどろした、沼のこと、「くら」は財宝を収納する床の高い建物、水上の宮となろうか。住吉神代記に、摂津国住吉の住吉大社（大阪市住吉区）とするが、この時住吉には忍熊王が居られ無理であり、摂津国菟原郡住吉郷（神戸市東灘区住吉）の方が、長峽を往來する船の監視としても、ふさわしい。

神々が自らそこに降りて神意を示し、崇敬者を受け入れるというは、その地の族を取り込め、さもなくば太刀打ちには叶うまいとの判断であろう。その結果忍熊王は更に撤退を余儀なくされ宇治に後退され、難波の緊張が無くなり、皇后も、南下し紀伊へ向かい、日高（和歌山県日高郡）で御子と武内宿禰に合流された。改めて、群臣と協議し、忍熊王を攻めることを確認し、小竹宮に入られた。

小竹宮は紀の川を遡った那珂郡志野村（紀の川市粉河町北志野）の志野神社の地。船での便を考えれば日高川河口の小竹八幡神社（和歌山県御坊市藺）の地もうなづけるが、この後の話とのつながりがよくない。

この時に不思議な現象が起こった。何日も昼が夜のごとく暗くなった。日食とするが、日食が何日も続くことはない。皇后が、その名からして物知りらしい紀直の祖、豊耳に一体どういうことかと下問されると、ある老父に聞いた話であるが、「阿豆那此の罪」だという。二社の祝（神職）を合葬したことというが

要領をえない。それを知る者を探してみると、二社とは小竹の社しのと天野の社、

小竹の社は志野神社、天野の社は丹生都比売神社にうつひめの（伊都郡かつらぎ町上天野）。余談であるが、丹は朱砂の鉱石から採取される朱、染料、水銀採取、船の錆止めに用いられた。皇后の船の逆鉾はこの朱で塗られ船艫舳に建てられ、船体の錆止めにも塗られ、その貢献に対して皇后が丹生都比売を祭っておられる。先の

摂津風土記、美奴売みぬめのところ、諸神祇が松原に集まったなかに、播磨風土記

逸文によれば、爾保都比売命にほつひめが居られるが、それが丹生都比売にうつひめである。

朱砂採掘の技術者は、呉や越から伊都国經由丹生へ入り、この地を伊都と

して、全国丹生神社の根拠地となっている。また、素戔嗚尊すさのをのみことが朝鮮半島から船舶材、宮材、棺槨材の木の種を持ち帰り、三子とともに、紀伊で植林したとされ、元来は木の国で、皇后の船舶を建造するにも貢献をしていた。武内宿禰が開明的であつたのもこのバックグラウンドがあつた。話を戻そう。

御子の居られる小竹の地で、かつて神官が病で死んだ。善き友であつた天野の神官はそれを嘆き、死なば同じ穴に入れてくれと言ひ残して、そのまま屍の上に伏せて死んだ。その言葉のとおり、二人を合葬した、その罪という。墓を開いてみれば、その通りであり、別々にして、別の墓に葬ると、太陽が光り照り、昼と夜がもとにもどつた。

阿豆那此あづなひは素戔嗚尊の無道、「あづきなし」、「あ」足「つき」着「なし」無、踏む所がないところからくるといふ。足綱ひ、「あづなひ」、「つな」は寄りすがる、頼みとする、「つなぐ」は獣を追ふこと、一体となることから、二人の神官を同性愛者とし、その二人を合葬したことを阿豆那此とする人がある。社は土地の神を祭るものであり、異なる土地の神を祭る神官が、本人同士の情を優先し同じ穴に入られては、それぞれの神の立場がなかったのかもしれない。しかし、それで日が陰るといふのはピンとこない。

古い話になるが、紀伊は磐余彦尊いはれひこのみこと（神武天皇）の東征において、名草で地元の神を殺した地、以来ずっと対立したままであつた。御間城入彦五十瓊殖天皇みまきいりびこいにゑのすめらみこと（崇神天皇）が紀伊の荒河戸畔あらかはとべの女、遠津年魚眼眼妙媛むすめ とほつあゆめまきはしひめを妃とし豊城入彦命とよきいりびこのみことをなされたのが修復の端緒で、武内宿禰が政権中枢へ登用されて以来、緊密な関係が築かれるようになったものである。緊急避難とはいへ、皇位をお継ぎいただくためにお迎えした皇后と御子であらせられる。新たな関係を結ぶためにも、この地のこれまでの罪や穢れを清めようとされたのかもしれない。

古事記は、皇后が、穴門から船を出された時に、御子は死んだという噂を放ち、喪船を用意させたと伝える。この不吉な現象に際しては、「息長帶日賣命おきながたらしひめのみことは既に崩りましぬ。」とすらしめた。諜報戦である。平成の私たちは、どうして皇后がそんなトリッキーなことをなされたのか、いぶかるだろう。書紀はそのこ



とには一切ふれない。

一言で言えば、皇后側は相当な劣勢にあった。相手を欺き、油断させることを必死に試みている。穴門を発つに際しては、御子が無事に連れ帰ることに大いなる不安があった。播磨から住吉へ忍熊王が撤退しなければ、御子を安全に日高へ避難させることも出来なかったかもしれない。務古水門に引き返さず、そのまま住吉に突っ込んでおれば、討ちとられていたかもしれない。神のお告げがなければ、その劣勢を補う事は到底出来なかった。

物部氏や大伴氏が西国で軍事力を発揮するのはずっと後のことであり、中臣氏は軍事の族ではない。日本武尊を継ぐ者に比すれば、水軍や兵站力においては勝るが、地勢、兵力でははるかに劣勢である。日本武尊の声望はまだ生きていた。ただ悲しいことにこの一族は神に翻弄されつづけてきた。

忍熊王が宇治へ兵を引いたのは、最強と目される東国の兵が片や瀬田川を渡り山背を牽制し、片や瀬田川を下り宇治の陣へと合流してくれるのを期待してのことであつた。皇后側からすれば、そうなる前に忍熊王を叩いてしまわねば、極めて不利となる。ここが天下分け目の決戦の場となる。相手の行動を一刻でも遅らせたい。この異様な昼の暗さは東国の進軍の足を止めたであろうし、皇后がみまかられたという噂は、緊張感を緩ませたであろう。その脈絡からすれば、この現象は日食でも、阿豆那此あづなひの罪でもなく、天照大神が、皇后のために、昼に岩戸にお隠れになられたごときものだ。

三月になり、武内宿禰は、和珥臣の祖武振熊たけふるくまに命じて、数万の兵で忍熊王に向かわせた。先の真野臣の条の難波宿禰にあたる。古事記では、難波は、吉師部の祖、伊佐比宿禰と丸邇臣の祖、根子建振熊たけふるくまとに勢力が分かれており、武振熊が武内宿禰と合流したことにより、忍熊王は菟道（宇治）に撤退せざるを得なくなつたともいえよう。武内宿禰はそこから精兵を選び、山背より宇治に至り、河の北に駐屯した。山背根子には東国の兵の状況を探らせ、瀬田方面から攻め込まれる懸念に備えた。

宇治川の北に駐屯したという記述が私の頭を混乱させた。これでは忍熊王は宇治川の南の布陣となる。一体どこに布陣したのか、逆ではないのか・・・

忍熊王はその出鼻を叩くべく出陣すると、熊之凝くまのこりが先陣を申し出た。葛野城かしのき首おびとの祖、あるいは、多呉吉師たごのきしの遠祖ともいう。首は渡来系であり、葛野とす

れば、山城國葛野郡葛野郷、京都市の西北部、秦氏の系統となる。これは蓋葛野城かしのき（柏木カシノキ）の訛りで、奈良佐保川から後に平群郡平端村に進出する熊凝朝臣という人もある。吉師であれば、半島と係わりが有り大彦命系、後に上野国の多胡郡（群馬県多野郡）に出た渡来人という人もある。はつきりしない。同族であっても、同地域であつても分かれて従軍しており、双方の調略活動が盛んに行われた結果であろう。その熊之凝が、味方を鼓舞せんとして、大きな声で、歌を詠んだ。

彼方をちかたの あらら松原まつばら 松原に 渡り行きて 櫓弓つくゆみに まり矢を副やへ 貴人うまひとは 貴人  
 どちら 親友いとこはも 親友いとこどち いざ鬨いざこはな 我われは たまきはる 内の朝臣うちあそが 腹内はらぬちは  
 小石いさこあれや いざ鬨あはな 我われは (宇治川の向岸の松林でバラバラと待つ(本当は一杯  
 いるのであるが) 敵をめぐけて、川を渡り、櫓弓に鏑矢をつがへて並び、位の高い人は  
 位の高い人同士、親しい人は親しい人同士、いざ戦おうではないか、我はゆかん。玉飾  
 りして矢をつがへる武内宿禰の腹に堅い小石が詰まっていて射貫けぬということがあ  
 るうか、いやあるまい。いざ戦おうではないか、我はゆかん。) 松と待つをひっかけ緊張を解き、日本武尊をつぐ武人の軍である、お互い含む  
 ところなく正々堂々と戦おうではないか、と声を挙げた。

武内宿禰は、敵が渡河をせんとした時に、髪を椎つちのように結いあげるように  
 命じた。そこに予備の弓弦を入れ込み、木刀を腰に下げさせた。それが終わる  
 と、皇后の命令であると、忍熊王に誘いをかけた。

「吾あめのしたは天下を貪むさぼらず、唯幼わかき王を懷みこきて、君王きみに従ふらくのみ。豈ほせに距き戦  
 ふこと有らむや。願ねがはくは共に弦を絶ちて 兵つはものを捨てて、與ともに連和うるはしからむ。  
 然して則ち、君王は天業あまつひつぎを登ありて、席みしに安く枕を高くして、專たくめよろずのまつりごと 萬 機を  
 制しまさむ。」(天下を自分のものにするつもりはない。私は吾が子を養育し、君主「神  
 が忍熊王を君主とするなら」に従うつもりである。どうして防ぎ戦うことがあろうか。  
 弦を切り、武器を捨て、共に連合して和そうではないか。君主となった者が「あまつひ  
 つぎ」の位「天皇」につき、その席を安らかにし、枕を高くして、すべての政「まつり  
 ごと」を統治せしめればよい)それを明らかにすべく、兵に命令して、弓の弦を切  
 り刀をはずして、河水に投入れさせた。

日本武尊の血を引く忍熊王は、これを信じ、軍勢に、兵器を河に投げ入れ、  
 弓の弦を切らしめた。こういう鷹揚さというか油断、相手へのみくびりが、土  
 地の神を怒らせ、相模の海で弟橘姫を失い、伊吹山で力を殺がれた日本武尊で  
 あった。皇后は、夫の行動からも、その家系の性格を読み切っておられた。

武内宿禰は兵に予備の弦を張り、本物の刀を腰につけさせ、渡河を命じた。  
 忍熊王は、倉見別、五十狹茅宿禰に騙された、予備の兵器がなく、戦えないと  
 悔しさを押し殺してつぶやき、突き崩された川岸から退却を始めた。信長が浅  
 井軍に裏切られたとき、ひたすら京に逃げ帰ったごとく、一目さんに瀬田川を  
 渡り、建部、犬上に入り込み東国兵を待てば、態勢を立て直し、皇后の軍の非  
 を責めることができた。まあ、だまし討ちは日本武尊のお得意であつたけれど。  
 ただ、川の南で退却すれば、宇治から奈良に向かうはず、しかし、忍熊王は、  
 山科を抜け逢坂から琵琶湖に向かっておられる。川を渡らねば向かえない方向  
 であり・・・陣が逆でないところはならない。

瀬田川を渡してはいけない。それ故、武内宿禰は精兵を以て忍熊王を追い、  
 追いついた坂を逢坂とした。ここでも破れた忍熊王は、狭狭浪さざなみ(琵琶湖)の栗林くるす

(石山近くの栗津)に逃れたが、この一帯が血みどろになるほどの兵を失った。「是の事を惡みて、今に至るまで、其の栗林の菓を御所に進らず。」凄惨なる現場となった。

ある人によれば、唐崎のあたりはかつては湖岸が陸側に入りこみ、湖中に突き出した「いとほどせまき岬」とされ、このような岬は常世への旅立ちの場、常世から神々が依り来る聖なる場、節季のかわりめに祓えが行われ、ここで祓えが行われると、常世の国から聖水が波だって寄せてきて、生命の若やぎと甦がえりを得ると信ぜられる場という(原田敦子…水辺の鎮魂)、狭狭浪には、そういう響きもあつた。栗林は瀬田川に入るあたりで唐崎の南になるが、常世への旅立ちの場となった。

忍熊王は覚悟を決められた。五十狹茅宿禰を呼び、歌を詠まれた。

いざ吾君 五十狹茅宿禰 たまきはる 内の朝臣が 頭槌の 痛手負はずは  
 鳩鳥の 潜せな(泣きつ面の五十狹茅宿禰の君よ「いさちに泣くをひっかける」 勢  
 い余る武内宿禰の頭槌「柄頭が塊状の太刀」を喰らうくらいなら、瀬田の濟にでも潜つてみるか) くやしさをにじませるでなく、宿禰を慮り、腹をくくって運命を受け  
 入れられたようにみえた。共に瀬田の濟に沈りて死にぬ。忍熊王は屍を川底に沈め、豊富な水量に行方をまぎらせ、敵に渡ることだけは避けようとした。

武内宿禰は稚足彦天皇(成武天皇)の大臣として国造の任命に携わっている。『旧事紀(国造本紀)』によれば、淡海国造に和珥氏、額田国造に氣長氏、を任命し、東山道では、同じ紀国出身の豊城入彦命の孫の御諸別王、大和、山城、河内、伊賀、伊勢の五国の多里人・八百九十七人を武蔵国入間郡に移住させ当地の窮状を救った東山道の十五か国の王、上毛野君・下毛野君の祖であるが、その子孫彦狹嶋命を上毛野国造に任じている。また、物部氏をたて、遠淡海国造(静岡県浜松市周辺)、珠流河(駿河)国造、久自国造(茨城県久慈郡)、三野後(美濃)国造、尾張国造、参河(三河)国造に任じており、また、茨城郡で勢力のあつた天津彦根命十四世子孫、建許侶命を茨城国造、その子等を師長国造(相模国西部)、上総国の須恵国造、馬来田国造(千葉県南西部)に任じ、更に出雲系の兄多毛比命とその子而无邪志(武蔵)国造、菊麻(千葉県市原市)国造に任命しており、武内宿禰は、日本武尊が平定した地域に楔を打ち込んでいた。忍熊王が期待したほどの東国の兵を動員できなかった原因であり、瀬田川を渡れないことが決定的であった。

武内宿禰は、忍熊王の屍をあくまで求めた。「淡海(あふみ)の海 瀬田(せた)の濟(わた)り 潜く鳥目にし見えねば 憤(いきどほ)りしも」(近江の海の瀬田の渡りに潜った鳥が上がって来ず見失った、なんと腹立たしいことか) 必死に探させたが見つからなかった。しかし、数日後に、宇治川に屍が出た。なんと神は、日本武尊の家系をまたも翻弄された。「淡海(あふみ)の海 瀬田(せた)の濟(わた)り 潜く鳥 田上(たなかみ)過ぎて 菟道(うぢ)に捕へつ」武内宿禰

は、瀬田の下流の田上（南郷洗堰あたり）の先で王を捕えたと報告したようだ。皇后は忍熊王の屍、確かに亡くなられたことが群臣に明らかになることを望んでおられた。武内宿禰もそのことには、こたわった。

たらしなかつひこのすめらみこと

皇后が御子を授けられたのが、足仲彦天皇（仲哀天皇）の生前であることを知り得る立場にあったのは、崩御された天皇と皇后と武内宿禰の三人のみである。しかし、御子がお生まれになったのは、一年と数カ月後のことであり、いかに神意とはいえ時期を大幅に超えている。天皇の御子、と人が素直には納得できまい。麿坂皇子・忍熊皇子このどちらかでも生きておられれば、あるいは、その死が明らかでなければ、やっかいなことになっただろう。

かこさかのみこ

おしくまのみこ

この天下分け目の戦いに、皇后は勝利された。授けられた御子が天下を治めることになるという神託の前段が実現したといえ、それまでであるが、古代

たらしなかつひこのすめらみこと

の歴史にあつても事はそれほど簡単ではない。当の足仲彦天皇ご自身が、神託を、信じるどころか、お疑いになった。皇后とて何度も何度も試してみられた。人は結果が出るまでは、信じられないようにできている。安閑としておられず、結果をだすために、とてつもない決断をされ、術数の限りを尽くして策略をめぐらされた。よい結果がでて、驕り過信をすれば、すべてを失いかねぬと着実に味方を養われた。

臨月の皇后が男装をして船を駆って海を渡る、ありえないことだ。神意で守られているといわれて、貴方が皇后なら信じてそうしますか。もし、夫とすれば、それを信じて送り出しましょうか。悔やんでも悔やみきれない後悔にさいなまれることは、平成の世でも古いにしへの世でも変わらない。

権謀であれ術数であれ、なんとしても御子を守る。劣勢にあつたこの戦いに敢然と挑む。神意を慎重に祭り、崇敬する族を取り込む。謀略で敵を分断し、油断させ、偽りの言を放ちひたすら勝利を求める。そこ、その姿に皇后の現実がある、という思いが私の中ではおおきく膨らみ始めていた。



## 七、時空のマジシャン

皇后は、天皇を河内国の長野陵に葬られ、年が明けた正月に、御子を皇太子とし、都を磐余いはれに定められた。磐余彦尊（神武天皇）が磯城しきの八十梟帥やそたけるを討ち中洲（奈良盆地）に入られた歴史的な地であった。二歳強の皇太子は異例、皇后自らが摂政となり、御子が皇位を継ぐまでは守り切る決意を示された。

ここで皇后が外交をされるが、登場してきたのが、微叱みしこち許智伐旱ほつかん、すでにみた新羅の人質、微叱みしこち己知波珍干岐なこつにしきん、奈勿尼師今の子、未斯欣みしきんである。皇后は一気に未来へとワープされた。

新羅王が、汗禮斯伐うれしほつ・毛麻利叱智もまりしち・富羅母智等ほらもちを派遣して約束通り朝貢をしてきた。中国においては、朝貢する者は、王であることや官職の叙任を求めるもので、帝が目通りし、朝貢の労をねぎらい、要件を満たしておれば叙授し、豪勢な賜物を贈る。書紀では、朝貢みづきたてまつると訓じており、朝貢するものが官職を得るでなく、逆に貢ぐばかりで、まさに、「みつきたてまつる」にすぎない。

この時、新羅の使者は、未斯欣に、人質になっている間に、妻子が官奴に貶められたと告げ、未斯欣は、虚実を本国に戻って確かめたいと皇后に訴え、皇后はそれを聴きとどけ、葛城襲津彦かつらぎのそつびこをつけて帰国させた。

ところが対馬の鰐浦に至ると、毛麻利叱智等は、秘かに、船と水手かこを手配して未斯欣を新羅に逃がし、束茅を人形にして寢床に置いて、病を得てあつという間に死んだと申し開きをした。襲津彦に見破られることは覚悟のうえ、時間を稼ぐ工作をした。三人の使者は捕らえられ、首を連ねて焚き殺された。

襲津彦は、新羅の蹈鞬津たたらつに乗り込み、草羅城さわらのさしを攻め落し、捕虜として鉄製農具を造る漢人技術者を連れ帰った。これは、桑原くさはら・佐摩さび・高宮たかみや・忍海邑おしぬみの漢人等の始祖となっている。渡来人とひとくくりに表現するが、漢人という表現には注意が必要だ。楽浪郡や帶方郡に入植した漢人あるいはその子孫と半島の韓人では、備えている技能が随分と異なる。

葛城襲津彦は武内宿禰の嫡男であり、葛城に拠を構え、半島においては將軍である。武内宿禰は宰相で政治面を担当し、軍事にはその子供たちが従事していた。

三国史記、列伝、朴堤上ぼくていじやうは、高句麗に質となっていた王（訥祗麻立干…在位408年）の弟の宝海を脱出させた人物。その知略を頼んで、王は美海（未斯欣）救出を命じ、堤上は倭に赴き、新羅王が自分の父兄を殺したと偽り倭王を信じさせ、美海を海に連れ出し逃亡させる。自らは捕らわれ、高祿で臣従することとを迫られたが、新羅の豚となっても、倭国の臣下にはならないと拒否。脚下の皮を剥がれ焼き殺されたとする。未斯欣が質となったのが、409年、逃亡したの

が418年というから、皇后はそのあたりの世に出掛けておられた。それが終わると、時間を戻された。

十年後、皇后は、武内宿禰と共に太子を連れて角鹿の筍飯大神を参拝された。この頃からは、皇后は皇太后と称されるようになっていた。皇太后は宴を催し、杯をあげて歌を詠まれた。

「此の御酒は 吾が御酒ならず 神酒の司 常世に坐す いはたたす 少御神の豊寿き 寿き廻ほし 神寿き 寿き狂ほし 奉り来し御酒を あさず飲せささ」(この御酒は私の醸んだものではない。少名彦命がめでて醸まれた神酒、神人合してめくるめく酔いしれる酒、とよみて祝い、祝いめぐるべく奉られた酒。残さずに飲み干せ、さあさあ)、と太子に勧められた。

すると、武内宿禰が太子に代わって、こう歌を詠まれた。

「此の御酒を 醸みけむ人は その鼓 臼に立てて 歌ひつつ 醸みけめかも 此の御酒の あやに うた楽しさ さ」(この御酒を醸んだ人は、鼓を臼のよう立てて、踊りながら醸んだにちがいない。畏れ多いがなんと楽しいことか) 何をされているのか、さっぱりわからない。うろうろした。

譽田別皇子の命名の経緯と関係する、譽田別天皇前紀を見ると声がした。御子がお生まれになったとき、腕に肉の塊があり、それが弓手の鞆のようで、昔は鞆を「ほむた」といったことからこの名がついた。それは俗説で、御子の名は、もとは、去來紗別尊であり、この地の神を譽田別神と云った。これを交換したものとある。なんのことか？要領をえない。仕方ないので、古事記に聞いた。

建内宿禰命(武内宿禰)が太子を連れて禊をするため行かれた。皇后は一緒ではない。それは、戦いに勝利した直後のことで、御子が成人されてからのことではない、また、二つの歌は、太子と宿禰が帰ってからの宴のことという。

角鹿で、仮宮を設けて籠っていると、伊奢沙和氣大神命が夜夢に出て、御子に名前を取り替えて欲しいと告げられた。御子が承諾すると、お札をするので明朝に浜に来るようにということで、浜に出ると、鼻を傷つけられた入鹿魚が浦に寄りついていてた。御子が、「私に下さった御食の魚」と札を述べ、神の御名をたたえて、御食津大神(筍飯大神)と名付けた。これが氣比大神の由来という。名前の交換は、書紀の話とは逆だ。結局は何が言いたいのか、分らない。

忍熊王を殺したことの禊であろう。気持ちには説明しても説明しきれない、説明しようとするほど、裏腹となることがある。ところが、歌はストレートに気持ちを伝えることがある。史家が事実を積み重ねて脇を固めたつもりでも、それを一気に突き崩すこともある。そうつぶやく声が聞こえたが、その気

持ちが分からぬまま時が過ぎた。

その二十六年後にとんでもない話を聞かされ、群臣同様、私は目を剥いた。大歳己未、西暦でいえば239年、それに60年を加えたり、引いたりしても、同じ干支になる。群臣等が「魏志に云く、明帝の景初三年(239年)の六月、倭の女王、大夫難斗米等を遣はして、郡に詣り、天子に詣むことを求めて朝獻す。太守、鄧夏、吏を遣はして將て送りて京都に詣らしむ。」と聞かされた。

皆が困惑していた。魏志は、魏志倭人伝で、明帝は魏の帝、「倭の女王」は卑弥呼、大夫難斗米等は卑弥呼の臣、郡は帶方郡、鄧夏は帶方郡の太守劉夏、官吏を付けて、朝獻をする一行を洛陽に送り届けた、と私は知っている。彼等は何のことかさっぱり分からない。「倭の女王」、日本の女王なら皇太后であるが、倭(奈良)の女王などは、昔のことで今はいない。難斗米などという名は聞いたことも無い。皇太后に朝貢するものはあっても、皇太后が朝獻されることはない。魏志とは何か？誰だ？一体何をとぼけたことを・・・武内宿禰もこういうわけのわからぬことを群臣に聞かせるようでは、もうろくしたものだ、とうやむやになった。これは私が彼等に説明して分かることではない。

239年、これは卑弥呼の時代、何故皇太后はこの時代に居なくてはならないのか。皇太后の時代に膝元の奈良の女王が皇太后とは勝手に魏に朝貢するなど、なんという珍奇な言い分であろう。バカバカしくて話にならないが、それがそのままだやむやにしかない。これで済まされる現実にイライラしたがどうしようもなかった。

翌年にも、「魏志に云く、正始の元年(240年)に、建忠校尉梯携等を遣して、詔書印綬を奉りて、倭國に詣らしむ。」と話が あったが、昨年の事もあり、誰か変な名の使者が紙に書いたものと印綬を奈良まで持ってきたらしいと大して気にもとめない群臣であった。

なんと呑気な。魏の帝の言葉が記された詔書、卑弥呼には親魏倭王の金印と紫綬、難升米には率善中郎將、都市牛利には率善校尉の銀印と青綬が授与され、濃い赤の地・龍が交わる柄の錦織り五匹・濃い赤の地・縮み粟粒の毛織物の壁掛け十張・茜色で深紫紅の布五十四匹・紺青五十四匹が答礼の御物。卑弥呼には別に曲線模様の錦織三匹・細かいまだらの花柄の毛織物の壁掛五張・白絹五十四匹・金八両・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠・鉛丹各、五十斤が贈り物であった。これらを直接本人に手渡すための使節。もし、印綬が本人に渡らず他人の手に入れば、その者が親魏倭王となる。だから、使節は確かに授与されたという証を持ち帰らねばならない。そんな大行事をへえゝ聞いてなかったでは済むはずがない。

ここまでくれば、皇太后が過去を改竄するためにこの時代に送りこまれておられると断ぜざるを得なかった。卑弥呼が親魏倭王に任じられたことを無かつ

たことにする。日本国が中国の帝に朝貢するなどありえない。それは日本国のなかの倭国（奈良）にある国の女王がしたこと、日本国には半島を従える皇后がおられ勘違いしてもらっては困る。そう突っぱねるために、皇后はこの時代に君臨せざるを得なくなっておられた。

それは三年後にも続き、「魏志に云く、正始の四年（234年）に、倭王、復、使大夫伊耆耆・掖邪狗等八人を遣はして、上獻す。」と話があつたが、もう振り向く者もいなかった。

この後どうされるのかと案じていると、皇后は、未来の百済と交渉に入っておられた。加羅七国の一つで新羅の西側に接する交通の要衝にあたる地（慶尚北道大邱）に卓淳国がある。先にワープされた新羅の西であるが、時代が半世紀ほど前である。卓淳の王、末錦早岐から要請があり斯摩宿禰を派遣された。末錦は寐錦とおなじく新羅の王号で早岐は加羅諸国の王号というから王王。斯摩宿禰は失われた百済記にあつた人で、日本では不詳というから、派遣したというより、話を持ち込んだのかもしれない。

百済から久氏・彌州流・莫古の三人が卓淳王のところに来て、東のはてに日本という貴国が有ると聞き朝たいが道が分からない。もし教えていただき道が通じれば我が王は大変感謝をする、と申し出た。あることは知っているが行ったことがない。海の向こうで波が高く、大きな船が必要で、海路も港もあるがどう行けばいいかが分からないと答えると、無理と分かった。帰って船を用意する。もし、日本からの使いがあれば知らせてほしい、と云い残して帰ったという。

皇后は、斯摩宿禰に命じて、爾波移と卓淳人の過古を百済に派遣すると、百済の肖古王は大変喜ばれ、使者を厚遇し、日本に朝貢することを約され、今は道がわからないのでいづれ改めて貢物を贈るが、蔵を開きとりあえず使者にと五色綵絹の綵絹（あやぎぬ）各一匹、角弓箭、鉄の延べ板三十枚を賜われた。二人は次第を報告し、斯摩宿禰は帰国をした。

肖古王は、百済本紀の近肖古王（在位360〜365年）であり、皇太后は、この時、この時代におられた。

翌年、肖古王は、久氏に爾波移と過古をつけ、日本に朝貢させたが、皇太后と譽田別尊の前には新羅の使者が同道していた。皇太后も太子も二国が一緒に来朝したことを非常に喜ばれた。ところで、貢物を点検しだすと新羅の豪華さに比べると百済のものはあまりに見劣りがした。久氏に問い詰めてみると、道に迷って、沙比の新羅に入り込み捕えられ殺されたという。貢物を取り



替えるが、それを言えば殺すと脅されて同行してきたという。皇太后と太子が新羅の使者を責めるとどうやらその通りである。

天神に助言を求めると、武内宿禰に調べさせ、百済、新羅へは千熊長彦を使者に立てるべしとなった。百済記に職麻那那加比跪とある人物で、武蔵の国の人かもしれないというから、東国の武人が起用されていた。新羅が百済の貢物を汚したことを責め、討つべしとなった。

二年後に、荒田別、鹿我別を將軍として、久氐を伴ない、卓淳国から新羅を攻めた。荒田別は上毛野、東国の武人であるが、毛野国Ⅱ木の国Ⅱ紀の国とされるくらいで、紀国と関連が深く、武内宿禰とも繋がりがあある。鹿我別は荒田別の弟である。しかし、兵力が足りない、百済に増援を請うべしとの助言があり、使者を派遣すると、百済王は、木羅斤資と沙沙奴に精兵を与え、これにより、新羅を撃ち破った。

その勢いで、加羅七國（比自火本「慶尚南道昌寧」、南加羅「慶尚南道金海」、喙國「慶尚北道慶山」、安羅「慶尚南道咸安」、多羅「慶尚南道陝川」、卓淳「慶尚北道大邱」、加羅「慶尚北道高靈」）を平定。続いて西に向き、古奚津（全羅南道康津）から枕彌多禮（済州島）を攻略し、この西部を百済に与えた。

この時、肖古王と王子、貴須が軍を率いて南下され、比利（全羅北道全州）、辟中（全羅北道金堤）、布彌支（忠清南道新豊）、半古（全羅南道羅州）、四の邑が戦わずして降伏してきた。肖古王と王子と荒田別、木羅斤資等、共に意流村で合流、千熊長彦のみ王と同行し、百済国に至り、辟支山（辟中と同所）に登って盟い、古沙山（全羅北道古阜）に登って、磐石の上で再び盟った。

「若し草を敷きて坐とせば、恐るらくは火に焼かれむことを。且、木を取りて坐とせば、恐るらくは水の為に流されむことを。故、磐石に居て盟ふことは、長遠にして朽つまじといふことを示す。是を以て、今より以後、千秋萬歳に、絶ゆること無く窮ること無けむ。常に西蕃と稱ひつつ、春秋に朝貢らむ。」  
三ヶ月遅れて、千熊長彦は、久氐等を伴って帰国。皇太后は、加羅七國と多沙城（蟾津江の河口付近）を百済にお与えになった、という。

日本の協力により、王の馬韓平定がなり、王が西蕃となつて朝貢する盟を結ばれたとするが、金富軾は百済本紀の近肖古王において、一切このことには触れていない。百済記は失われており、断片的な倭人名がみえるにすぎない。空白の馬韓平定である。

その急激な領土拡大を維持するには倭国の軍事力を必要とした。百済と日本やまとがお互いが必要として、心を通い合わせていたのは、近肖古王の時代のみではないかと思えたくらいである。

く  
て  
い

3

―であるが、この時代はどうであつたのか？加羅七国にひっかけているという人もいるが、駄洒落の類、近肖古王の業績からすれば、些細にすぎる。

七枝刀には、「泰和四年（369年）□月十一日」という日付のほか、「百練の鉄の七支（枝）刀を作る。以つて百兵を辟除し、候王の供用とするのに宜しい。某（あるいは工房）これを作る」裏には「先世以来未だ見なかったこのような刀を、百済王と太子とは、生命を御恩に依存しているが故に、倭王の御旨によって造った。願わくはこの刀の永く後世伝わるように」という風な銘が刻まれている。読み方も解釈も人によって違うので、私の話もあてにはならない。

近肖古王が谷那の鉄山を手に入れたのは371年で369年であればこれは谷那の鉄山の鉄で造られたものではない。侯王とは、天子から封せられたその地の王。近肖古王が天子で皇太后が侯王というのは、裏の銘文の意味と合致しない。泰和は、東晋の年号。東晋の帝が天子、近肖古王が侯王であれば意味が通る。「鎮東將軍領樂浪太守」に叙せられた時に下賜されたとなれば、具合がいいが、373年簡文帝の時となり合わない。369年ならば、廢帝（海西公）であり、近肖古王が高句麗を討つ前で下賜は成立しない。入貢時にそういう経緯で造られていた刀を入手し、裏に、新たに銘を刻んで、漢人の技術の高さを示すものとして、また、そういう技術と人を導入して百済が国を建設しているという言葉と日本の協力を謝して、皇太后にプレゼントされたのではないかと思つた。

久氏は帰国して、孫の枕流王にこう言つた。肖古王の子が貴須、その子が枕流。「私が通っている海の東の国は、天の啓きたまふ所。天恩を垂れて、海の西を割いてわれらに賜わつた。だから、国の根本は永遠に固い。あなたも善く和好を脩めて、国の産品を集めて、奉貢すること絶やさなければ、たとえ死ぬといえどもいかほどの恨みがあるう。」かくて年毎の朝貢が始まつた。

近肖古王のことは、日本側も敬意を払って、皇太后五十五年（395年）にその訃報を、五十六年（396年）に、王子貴須の王への即位を伝えた。日本を評価し、国のつくりかた、産業技術、漢人の用い方、高句麗、東晋の情報を伝授された。日本の軍事力を半島の南から北に引つ張り上げ、高句麗に対峙するに至つたのは、近肖古王が高句麗をはるかに越え、遼西、晋平二郡を平定するという百済の未曾有の強大化と無縁ではなかった。干支を二運（120年）乗り換えて皇太后はそこにおられた。

近肖古王が亡くなると、半島の勢力バランスは、変動し、広開土王談徳が猛烈な勢いで南下する。392年に百済は談徳に北方の十四城を陥され、これを恐れ兵を出すことなく、漢江の北の諸部落も奪われ、要衝の閼彌城も攻め落される。

倭国は、これを咎め、百済は閼彌城奪回を目指すも談徳に大敗を喫し、397年に太子の典支を質として倭国に送っている。百済や新羅が、前門の高句麗、後門

の日本やまとに悩む時代である。

広開土王碑によれば、399年高句麗の奴客として臣従することを誓った百残（百濟）が誓いを反故にして倭わと通じ、新羅からは救援要請があり、談徳は、500年五万の歩兵と騎兵を派遣し、新羅から倭兵を追い払い、任那加羅の城をも抜いた。しかし、空になった新羅を安羅が落していた。安羅と倭は通じており、再び倭が城に満ち、城民が逃散した。402年に新羅が倭に質を入れた背景である。

日本やまとといえは親百濟、反新羅と思う人が多いが、必ずしもそうでなかった。平成の世を親米一辺倒と後の人は思うかもしれない。それは幻想だ。新羅の人が反日本やまと、百濟の人が親日本と決めるのも無理がある。日本にも親高句麗、親新羅はあった。

皇太后の六十二年（362年）に、百濟記壬午年（362年）の話がある。新羅が朝貢に來ないので、沙至比跪さちひこを派遣して討たせた。新羅人は、着飾った美女二人に、港で沙至比跪を誘わせ、沙至比跪は、美女を手にし、逆に加羅國を攻めた。加羅王、己本旱岐こほかんき、兒百久至こはくくち、阿首至あしゆら、國沙利こくさり、伊羅麻酒いらます、爾汶至等は、人民を連れて百濟に逃げ、百濟はこれを厚くもてなした。

加羅王の妹、既殿至けでんちは、大倭にに向いてこう訴えた。「天皇は、沙至比跪を派遣して、新羅を討つおつもりと伺っていましたが、新羅の美女を受け入れて討たず、逆に我が國を滅しております。兄弟、人民、皆さすらい、憂え、とても黙ってはおれず参りました。」（百濟記はここまで）

おやてつきり皇太后と思っていると天皇という。女同士の膝詰め談判かと思いきや、氣長足姫天皇おきなながたらしひめのみことというのではない。夢を見ているごときもので、顔を見ると男性に入れ替わっている。まさにマジシャン。どうやら、皇太后の御子じやなくその先の天皇、お顔を知っているわけではないが、大鷦鷯天皇おほささぎのすめらみこと（仁徳天皇）のようであった。沙至比跪さちひこというのは武内宿禰の子の葛城襲津彦である。

天皇は、激怒なさり、木羅斤資もくらこんしを派遣して、兵を率いて加羅に向かわせ、その社稷を加羅王に戻された。天皇が百濟の將軍を派遣されるとは、これも妙なことで、どう理解すべきか・・・先にすすめよう。ある人の話によれば、沙至比跪は、天皇の怒りを知って、姿を隠していた。その妹が、天皇にお仕えしており、比跪は、密に使いを送り、天皇の怒りが解けたかどうかを探らせた。妹は、夢に沙至比跪を見たのですがときりだと、天皇は、どうして夢に比跪がでてくるのか、と大いにお怒りになった。妹がその言葉を伝えると、比跪は、免れざることを知って、石穴に入りて死んだという。

葛城襲津彦は死んだわけではない。噂としても、主流の中心の將軍が新羅に取り込まれたとするのは、半端な話ではない。これが原因で半島から帰国することが出来なくなり、大鷦鷯天皇の皇后であった娘の磐之媛の運命に悪い影を



落した。噂話のみで終わっているが、中枢部においても、百済一辺倒でなかったことは確かであろう。それもさることながら、皇太后が天皇と入れ替わられた瞬間は、まるでショーをみているようであった。いかなるトリックを使っても瞬間移動をするのか。哑然としていると、

あつという間に十年が過ぎていた。

貴須王が薨<sup>みまか</sup>られ、あの王子の枕流<sup>とむる</sup>が王になられたと発表があった。久<sup>く</sup>氏<sup>てい</sup>の話

を聞いていた枕流<sup>とむる</sup>王のこと、さぞよき治世かと期待をしていたが、翌年には、

枕流王が薨<sup>あくる</sup>られ、王子阿花<sup>あくる</sup>が年少なので、叔父、辰斯<sup>しんし</sup>が「奪<sup>しん</sup>ひて立ちて」王となつたと発表があった。摂政となられて六十五年、老齢となられた皇太后は心を痛めておられたことであろう。

その翌年には、群臣には又何のことやらさっぱりわからない発表があった。皇太后もお歳だ、武内宿禰もぼけていると、彼等がひそひそ噂をしていたのを覚えている。

「武帝の泰初の二年の十月に、倭の女王、譚を重ねて貢獻せしむ。」

泰初の二年とは266年、皇太后の六十六年も266年である。武帝とは、晋の世祖（司馬炎）、倭の女王とは、卑弥呼の宗女臺與<sup>いよ</sup>であることは私には分かるが、時の彼方の群臣には、云つても戯言にすぎない。マジシャンのごとく時を駆け<sup>おきながたらしめのみごとく</sup>る氣長足姫尊の姿をみたのは、これが最後であった。

その三年後に皇太后は崩御された。太歳、己丑<sup>ちのうし</sup>（269、329、389、449年）百歳であらせられたという。193年に皇后になられ、418年の新羅の質に対応をされた皇后、百歳ではおさまらない。時空のマジシャンとされたが、私にははるかに若くみえた。卑弥呼の長寿に釣り合うように配慮されたのだろう。

この皇后のお気持ちを考える前に、どうしても欠かせないもう一人のタイムトラベラーの話聞いてもらわねばならない。武内宿禰だ。

## 八、武内宿禰

武内宿禰が最初に登場するのは、大足彦忍代別天皇（景行天皇）三年（AD73年）のこと、最後となるのは、大鷦鷯天皇（仁徳天皇）五十年（AD362年）、この差引が年齢になるものではないが、人間の寿命を超越しており、架空の人物とされている。

すでにみたように大足彦忍代別天皇三年に、屋主忍男武雄心命が、紀直の遠祖、菟道彦の女、影媛を娶り生まれたのが、武内宿禰であった。屋主忍男武雄心命は大彦命の腹違いの弟、彦太忍信命の子、皇族である。

武内宿禰の少年時代の最初の仕事は、北陸及東方の諸国の地形、姓のある有力な族の消息の視察であった。西暦でいえば59年のこと。ただ、その報告の内容が、礼記、礼運の引用であり、当時の日本にはない。ワープでもしなければ無理な内容であった。

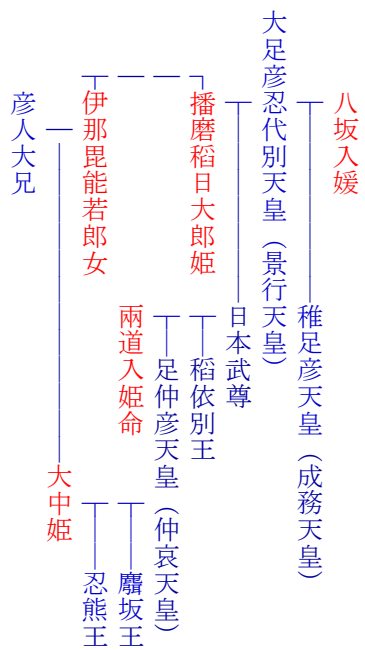
皇子の稚足彦尊の遊び相手であり、二人はある時、宴に参加せず門番をしていた。天皇がどうして一緒に宴に出ないのかと問うと、皆が浮かれている時が危ういので非常時に備えているとし、天皇は見所ありとされた。よって、皇子が皇太子とされた時に、棟梁之臣（天皇を支える臣）となり、天皇と為られた時に、大臣となった。我が国ではじめての大臣である。

宿禰は、日本武尊以前に北陸、東北を視察しており、日本武尊の為されたことを皇太子の側近として視てきた。また、稚足彦天皇（成務天皇）の大臣であった時、国郡に造長を立て、縣邑に稻置を置き、楯矛を与えて任じたというから、この実務の事実上の推進者であったろう。これは、卑弥呼が三角縁神獣鏡を用いたことを意識したものであるが、歴史上では順序が逆で、そのころは、目をつぶっていたいただきたい・・・またこの頃から、山陰、山陽という言葉が使われ、瀬戸内海側を山陽とした。この航路の重要性が増してきたことの表れであった。

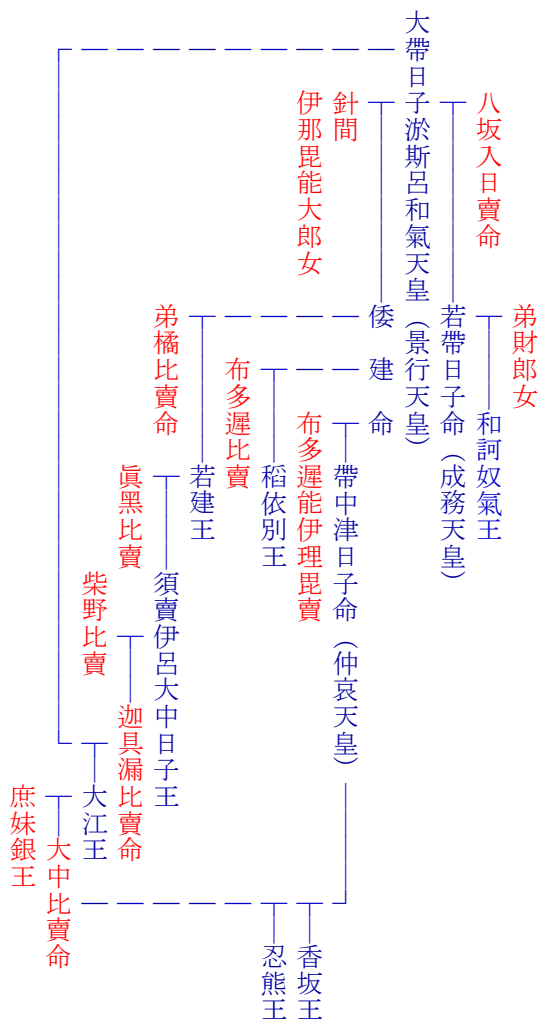
宿禰が大臣として困ったことは、後継者問題であった。奇妙なことに、稚足彦天皇は、五年以降には何の事跡もなく、突如四十八年（28年）に三十一歳の足仲彦尊を皇太子にされ、六十年で崩御されている。これでは足仲彦尊は14年生まれとなり、大足彦忍代別天皇（景行天皇）四十三年（113年）に亡くなった日本武尊の御子たりえなくなる。この無茶な設定は、弟である五百城入彦皇子、忍之別皇子、稚倭根子皇子、大酢別皇子等の出番を暗に封じる結果とはなる。ここでは時空がゆがんでいて理解不能な現象が起こる。古事記に聞くと、稚足彦天皇と穗積臣等の祖、建忍山垂根の女、弟財郎女の間、和訶奴氣王がお

られたという。後継者になれなかった理由を問うと、横を向かれてしまった。書紀に聞けば、それはノーコメント、甥の足仲彦尊を皇太子とせざるを得なかつた、と齒切れが悪い。では、何故長男の稻依別王でなかつたのかと聞くと、更に、ノーコメント。古事記にもう一度聞くと、生母が違ふ、母君は淡海の安国造の祖、意富多牟和氣の女、布多遲比賣、と冷ややかである。

書紀による系図



古事記による系図



足仲彦尊の母は、活目入彦五十狹茅天皇（垂仁天皇）の女、兩道入姫命、名前が似ておりややっこしいのだが、格が違う、ということだろう。だけど、書紀は古事記と違って、いなよりわけ 稻依別王を長男としていたではないか、と迫ると押し

黙ったまま。事情がさっぱりつかめなかった。宿禰も頭を悩ましたことであろう。そんなこととはおかまいなしに、足仲彦尊は、敬愛する父、日本武尊の母ひこひとのおほえの妹の子、彦人大兄の女、むすめ、大中姫と懇意になり、かごさかのみこ、麿坂皇子・忍熊皇子をなされた。いささか、強引なところがおありになった。

この大中姫にも不思議な噂があった。大中比賣命といひ大江王の女といひ。おほえ

大江王といひは、おほたらしひこおしろわけのすめらみこと、大帶日子淤斯呂和氣天皇が迦具漏比賣命との間にもうけた御

かぐろひめのみこと

やまとたけるのみこと

子であるが、この迦具漏比賣命は、私の曾祖父は倭建命というたそうだ、時系列が成り立たない、つまり未来から忽然とやってきたという。父は

おとたらはなひめ

おとたらはなひめ

須賣伊呂大中日子王、その父はかの若建王、倭建命と入水された弟橘比賣の間の御子とすらすると申された。足仲彦尊は、そのような噂よりは、姫に魅せられて、さつさと御子をなされた。不可思議な噂より、目の前の現実、そつちをおとりになるようなタイプとみえた。

おほたらしひこおしろわけのすめらみこと

わかたらしひこのすめらみこと

武内宿禰は、大足彦忍代別天皇（景行天皇）、稚足彦天皇（成務天皇）

たかあなほのみや

の重臣であり、近江の志賀の高穴穗宮の重要性を十分に認識していた。彼の頭の中には、全国的情勢がはいっており、瀬戸内海の水運が活性化され、淀川水系、琵琶湖、北陸という河川ルートに従って人と物資の流れが増していることを誰よりも認識していた。大足彦忍代別天皇の九州への巡守、日本武尊の熊襲征伐がなされて、一気に活性化させられたものであるが、海人の役割が大きくクローズアップされた。

宿禰は、紀氏の海人の伝統をも受け継いでおり、この流れに乗り、紀氏の海人が難波、淀川水系と、あるいは讃岐、伊予、播磨や吉備へと連携することが

おきながし

できるように大臣として采配することができた。その時、琵琶湖東の氣息氏の

むすめ

おほなかつひめ

女と足仲彦天皇の縁談がもちあがった。父最良の天皇のこと、群臣は大中姫を皇后にされるものと思っていたので、意外ななりゆきであった。

おきながたらしひめのみこと

氣長足姫尊は噂通り美しい顔立ちをしておられた。新羅の王子、天日槍の血を引いておられたことがあったかもしれない。それ以上に素晴らしい理解力と判断力を備えておられたことを宿禰は知ることになる。

宿禰はこの話に乗った、というより、ひよつとすると、糸をひいていたのかもしれない。淀川水系以北、そして半島とのルートを有する和珥氏との連携が太くなる。敦賀、若狭、丹波、但馬、あるいは、敦賀から越方面への展開も容易となる。天皇が筥飯宮けひのみやを設けられた以降のことは既に見た。

宿禰の行動をみていて私が描いたイメージはこうだ。

宿禰は軍事よりも政治、政治よりも物資の流れに目を注いでいた。海人による海運、どこを拠点にし、どことどこを結べばいいか、それにはどの氏族の誰



を用いればいいのか、これは大臣として、国や邑の長を任じた宿禰にはうってつけの役回りであった。ただ、天皇の支持がなくては、それを推進することはできない。天皇の周辺には日本武尊に従軍した軍事に長けた氏族も集っており、海運に携わるような氏族を見下したようなところがあり、天皇が宿禰を重用されることを快く思っていない者も結構あったようだ。

宿禰は、父君の武勇により、この国の平定ができたことを偉大な業績としたうえで、国の運営は軍事とは別であることを説いた。諸国の情勢を説明し、高穴穗の宮を前二人の天皇が重視された経緯を説明した。これが今起こっている新しい流れであること、それを成し遂げるために、諸国や邑に長を置き、物資の集積、分配を円滑にし氏族を富ませ、その上を徴集し、港の整備や船舶の調達を計る。天日槍が播磨から、宇治、敦賀、丹波、但馬を辿ったごとく、瀬戸内ルートと昔からの日本海ルート双方を押さえれば国をことのほか豊かにすることができ、それが大足彦忍代別天皇、稚足彦天皇のお考えであったことを粘り強く説いた。しかし、これを推し進めると、熊襲とぶつかることを宿禰は表に出さなかった。

天皇は半分は頷かれたようで、敦賀にも紀伊にも拠点をつくることを同意された。こう動いたことで熊襲も動き、穴門を挟んでの双方の対峙となった。しかし、日本武尊の武勇を奉じる氏族は、これが熊襲の反乱としか映らない。宿禰は背後に半島の勢力があることを見据えていた。

天皇にそのことを申し上げ、これを討たねば解決しないことを言上したが、天皇は奈良の諸族の理解を越えたことで、無理と却下された。これを理解していたのが、なかとみのいかつのむらじ 中臣烏賊津連・大三輪大友主君・物部膽咋連・大伴武以連であり、宿禰は檀日へと同道させた。宿禰は、天皇が何故皇后を同行されたのか、不思議であったが、天皇が皇后から聞いたという琵琶湖や日本海についての知識を口にされることがあり、どうやらそれは皇后のご意向であろうと見当をつけていた。

皇后はその育ちからか、理解力が鋭かったのか、この事態を直感的に理解をしておられた。そんな折り、神託があった。古代において重要なことを決めるにおいて、占いがなされる。一つは新羅を討て、一つは皇后が妊娠をされたことの告知があった。天皇は、新羅を討つことには反対をされた。この時よく分からなかったのは皇后の妊娠に対する天皇のご反応である。これをも疑っておられてか、何の反応もされなかった。結婚して八年、これまで御子がなくば、今更授かったというは信じられないという気持ちには理解できる。だが、これを皇后に確認すらされなかった。

一番驚かれたのは、皇后ご自身であつたらう。皇后は、おそらく、夫はもしかするともはや、あきらめておられるばかりか、ひよつとすると、すでに皇太子を大中姫との皇子と定めておられる、と思われたかもしれない。聡明な皇后である、もし、本当に妊娠しており、御子が無事生まれまして、男児とすれば、その子の未来はどうなるか？そう思い当たると、慄然とされたであろう。

やっかいなことになると思われて不思議はない。だとすれば、御子も私もやっかいものとなる・・・自分自身がよほしつかりこの先を見据えておかなければ、孤立をしかねない、なんという時になんという神託が下ったものか・・・暗澹たる気持ちであられたのかもしれない。

私は、ある人が、武内宿禰が、天皇が琴に伏せってお亡くなりになった後、お祓いをして、最後まで神託を請い、男児を妊娠されたことまで確認したと話したことに、その時は、何故そのような不謹慎なことができたのか、奇異な感じを抱いていたが、今にして思えば、宿禰がどうしてもそこを知ろうとした事情が分かるような気がした。

いずれにせよ、不幸なことに天皇はみまかられた。日本武尊をつぶさにみてきた宿禰には、これはどうもこの一族にふりかかる運命のごとく思えた。神々は尊の働きを必要とはされているが、尊が第一人者となれることを何故か望んでおられなかった。今、また、その御子が思い通りなされることをよしとされず、命までも召しあげてしまわれた。

宿禰は天皇の葬儀と後継者のことで頭を抱えた。一旦熊襲の側との和平を行い、纏向に戻り葬儀を執り行わねばならない。天皇は皇太子を決めておられず、

かじさかのみこ

おしくまのみこ

纏向に持ち帰れば、麿坂王あるいは忍熊王が当然のごとく推されるであろう。神託は、新羅を討て、皇后に御子がおられると出ている。宿禰は、この御子が男児で天下をおさめることになることまで確認をしたようだが、それを知っているのは皇后と自分と中臣烏賊津連くらいのもので、それで纏向の百寮を納得させることは、できようはずもない。

なかとみのいかつのもろこ

大臣として、宿禰は、ここは櫃日を撤退し、纏向に戻るほかあるまいと腹をくくって皇后のもとを訪れた。

宿禰は、この時のことを夢に見ては動揺してとび起きるという。雷に打たれたような衝撃に、一瞬、皇后のことばを聞き違えたのではないかとうろたえた。

天皇の喪を伏して、新羅を討つ、生まれてくる御子を奉ずべしと聞こえた。宿禰が啞然として、かろうじて復唱をすると、そのとおりと頷かれた。なんという女性であろうか。万が一にもあり得まいと思っていたことばであった。皇后は宿禰の考えの先までを見据えておられる。何が皇后をかようにさせたのか？宿禰に知る由もなかったが、それが皇后のご決断であった。その後のことは、すでに見た。

私も皇后のこのおことばに腰が抜けた。しばらく、腰を押さえたまま立ちあがることができなかった。

武内宿禰は三百歳に近い年齢を数えるが、歴史上西暦では362年過ぎが上限

ほむたのすめらみこと

おほさかきのみこと

である。宿禰は、氣長足姫尊の後の譽田天皇（応神天皇）、大鷦鷯天皇（仁徳天皇）の大臣でもある。一方、418年に氣長足姫尊が登場されるのは、千支の世界の妙なところであった。宿禰が人間であるには、362年あたりから70～80年

以前の生まれの人でなければならぬ。そうであれば、卑弥呼が鏡を用いたごとく、楯矛たてぼこを与えて長を任じておかしくなく、氣長足姫尊も300年代前半に政權についておられるとできる。いい加減なものだが、私にはそれが目安になった。先に進むために、これ以降の宿禰の活動をざっとみておこう。

譽田天皇の御世においては、七年に、高麗人、百濟人、任那人、新羅人、が来朝した時に、武内宿禰がこの韓人等を使って韓人池を造っている。

九年には、危機を迎えた。武内宿禰が筑紫の氏族の監察に派遣されたとき、弟の甘美内宿禰うましうちのみくねが、兄は筑紫を裂いて、三韓と結び天下を取ろうとしている、と讒言をした。天皇は武内宿禰を殺すべく使者を送られた。武内宿禰は無実であるに殺されることを歎いた。その時、武内宿禰に顔かたちの似ていた眞根子まねこと

いう壹伎直の祖が、無実で死ぬことはない、秘かに朝廷に戻り弁明をしてから死んでも遅くはない、と身代わりになった。武内宿禰は、秘かに、南海から紀伊、そこから朝廷にもどり無実を天皇に奏上する。天皇が二人に弁明させたが是非を決めることができず、探湯で決着をはかることになった。熱湯に手をいれて偽りを云う者の手は熱でただれるが、偽りがなくなれば手に異常は起こらないというもの。武内宿禰はこれに勝ち、甘美内宿禰を殺した。

十三年には、大鷦鷯尊が天皇に献上された髪長媛を見染め、大鷦鷯尊は武内宿禰を頼って、髪長媛を得ることができた。

大鷦鷯天皇の御世においては、五十年に茨田堤まむたを造成すると、鴈が子を産んでいた。これはどういう事かということで、武内宿禰に下問があったが武内宿禰は私も聞いたことはない、と述べたのが最後の登場であった。

これからすれば、武内宿禰の政治的活動の輝きは氣長足姫尊と共にあったときと知れる。その子の譽田天皇の時に、三韓と手を結び天下を取ろうとしていると弟に讒言されたのは皮肉なものだった。これは、政治的にその中核を担ったのが武内宿禰であり、探湯でそのような野心はないことが示されたが、まさに紙一重、天皇もどちらか、弁明を聞かれても判断に窮された。

半島において、その子、葛城襲津彦が先陣を務め、荒田別は武内宿禰とつながっており、鹿我別は荒田別の子であった。以降半島で行動する將軍達、紀角宿禰・羽田矢代宿禰・石川宿禰、木菟宿禰、的戸田宿禰などは武内宿禰の子、あるいは孫であり、半島での主導権は、武内宿禰にあった。また、葛城襲津彦むすめの女、磐之媛はいはのひめ大鷦鷯尊（仁徳天皇）の皇后であり、後に栄華を極めることになる藤原氏、あるいは平氏のごときもの、藤原不比等も平清盛も武内宿禰を手本としたのではないかと思いたくなる権勢の築き方をしている。

そのうえ、襲津彦自身が新羅との関係を疑われて、半島から帰れなかったようであり、父の武内宿禰が讒言されたというのもまんざらのことではあるまい。

熊襲の反乱には半島勢力との連携があり、半島に出れば、半島のどの勢力と結ぶかについて、百済一辺倒ではなかったという事情がある。半島側でも高句麗と日本、北と南からの脅威があり、双方とどう結ぶか、また、百済、新羅、加羅諸国間の関係も結構流動的であった。

しかし、これが武内宿禰の転機となり、本人は影響力を急速に失ったが、その子供たちは隠然たる力を有していた。驕る平家も久しからず、後の世にこの一族の力を削ぐことが課題となるのも領ける。

しかし、宿禰が天皇になろうと画策するような気配はみられない。すぐれた宰相であったと私には思えた。



九、皇后のみこころ

「此の御酒は 吾が御酒ならず 神酒の司 常世に坐す いはたたす  
少御神の豊寿き 寿き廻ほし 神寿き 寿き狂ほし 奉り来し御酒を あさず  
飲せ ささ」

「此の御酒を 醸みけむ人は その鼓 臼に立てて 歌ひつつ 醸みけめか  
も 此の御酒の あやに うた楽しさ さ」

皇后と武内宿禰の筥飯（氣比）での歌であった。

この歌の情が分ならず、氣になったままここまで来た。御間城入彦五十瓊殖  
天皇（崇神天皇）の御世に、「此の神酒は 我が神酒ならず 倭成す 大物主

の 醸みし神酒 幾久 幾久」という歌がある。この天皇の御世に、病氣が流  
行し多くが死に、氏族が背くという不穏な情勢となった。それは、天照大神、  
倭大国魂、二つの神を、天皇の大殿の内に並べて祭っていたことに起因する  
ことが分かり、長い道のりの果てに倭姫によって、天照大神は伊勢の地で祭ら  
れることとなる。倭大国魂に関しては、大物主神が、大田田根子を大物主神を

祀る祭主とし、市磯長尾市を倭大国魂神を祀る祭主とすれば、天下は平らぐと  
告げられ、その和解の宴に、大物主神の醸まれた神酒を天皇と大夫も頂かれ、  
神人の和合が達成されることになった。そして、病と反乱が治まった。

皇后と武内宿禰が御子の禊を求めておられたことはすでにみた。

この御酒は神酒。それを醸まれた神は、あの熊野の御崎の岩から常世にお発  
ちになられた少名彦命。この世の人々や畜産の療病方を定め、鳥獣、昆虫の災  
いを払うための禁厭法を定め、大国主命とともに天下の経営を行い、道半ばに  
して常世にゆかれた。人間には大恩ある癒しの神である。

少名彦命も大国主命の幸魂、奇魂である海の彼方から現れた大物主神も渡  
来系であった。大国主神が国譲りをされ皇孫が降りてこられる間の葦原中国の  
統治を天照大神から任されたのが大物主神。今は、三輪山に居られる国神の総

帥である。皇后も母方を辿れば渡来系、筥飯の神も渡来系である。皇后は天神  
の神託に従ってこられた。自らの祖先である渡来し国神とられた神々のご意  
向にはかなっていったのか、助力はいただけなのか、少名彦命に伺いをたてられ  
た、と私には思えた。

皇后が決断された道は険しいものであった。夫は武内宿禰と熊襲討伐に乗り  
出された。かつてその熊襲を平定したのは、夫の父、日本武尊であられた。夫

は、今度は天皇として、熊襲を討とうとしておられた。穴門へ移って八年、ようやく樞目に拠点を築くことができた。この熊襲討伐が長期化してしまった最大の原因は、どうやら熊襲の背後に新羅がついていることであつた。

これは最前線の樞日におれば分かることであるが、中洲（奈良）に居ては分らない。夫は父に出来たことができぬはずはないと熊襲を相手に戦うのみで、結局命を落としてしまわれた。

さて、われわれは歴史の観客席にいる。野球場に向いてゲームを観戦するなら、一球で流れが変わり、一打一打に身体が動き、予期せぬ判断ミスやエラーも起こり、ゲームの行方にドキドキハラハラする。しかし、ニュースハイライトでは結果が分かつての観戦。昭和の名勝負となれば結果の結果、もう分かり切つたことを前提として、観る。しかし、われわれが観るのは、正しい結果とも分からぬ伝承、出来あがつたイメージである。

皇后が皇位を引き継がれるのは、当然の事、男装して新羅遠征の大成果を挙げられることが前提で、それがない神功皇后紀など無いに等しい。御子が生まれるまで一年数か月、その間天皇のご崩御を伏せ、御子の妊娠を隠し、産み月に新羅へ遠征する、およそありえないことの連続を観る。神話あるいはのっけから作り話と割り切るしかないのか。

私は、一切を白紙に戻し、考え直すことにした。

天皇が崩御された時点では、皇太子が定まっていなかった。この状態で、皇后が天皇の後継者となられる可能性はないはず。まさむく纏向に戻つて、議すれば、麿坂

王・忍熊王のいづれかとなる。おしくま皇后が妊娠され、宿禰が神託で男児と確認したとしても、確かめようはなく、効力はない。かりに、男子が生まれていても、赤子が即位することはできない。

武内宿禰は、纏向の旧勢力とは異なり、流通と交易を重視する勢力を糾合し、半島への進出をもくろんでいる。麿坂王・忍熊王では、それは適うまい。纏向に戻れば、主導権はとれない。武内宿禰も正統なる世継ぎを奉じることができねば、単独で、その行動を起こすことはできない。

皇后が御子を生まれ、その御子を皇位につけるには、武内宿禰を味方に引き入れるしかない。纏向に戻ればその可能性は消える。そこは武内宿禰と一致する。神託ありとはいえ、いちかばちかの大勝負である。旧勢力と戦うとなれば、地勢、兵力においては圧倒的に劣勢である。

天皇の喪を伏せ、天皇の詔で新羅遠征の命令を出すというのは越権行為であり、いづれ事が明らかになれば、逆賊となる。喪を伏せている間に、新羅遠征の大成果を挙げ、それを神意実現の大義として嫡男を奉じることが出来ねばならない。

この時点での皇后にとつての最大の仕事は、男児を無事にお産みになること。武内宿禰は喪を伏せている間に一気に新羅を攻略しなければならぬ。

あなたが皇后ならどうします。武内宿禰が味方してくれる感触は十分あるが

保証はない。彼が必ず味方し、一気に新羅を攻略し、御子を奉じて旧勢力と戦ってくれる、奇跡が重ならねば実現しないような見通しに、我が身をかけるような決断ができますか。誰にも相談できずに、あなた一人で、それを決めなければならぬ。

決断するだけでは足りない。天皇の喪を伏して、つまり全体を騙して、天皇の命令のごとく、身重のままでそれを実行せねばならない。自ら戦をする必要はないが、敢然として命令を伝える立場を演じきらねばならない。神託が成就するというなら、そこに身を投じなくてはならない。

危うすぎる、かようなことが実現するとは普通の神経の持ち主には信じられない。

皇后が政権篡奪者として描かれることがなかったのは、勝者となり、御子の摂政として、河内政権を生みだされたことにある。更に、後の史書編纂時に、卑弥呼の代役に充てられ、また、近肖古王との外交関係樹立、馬韓平定の立役者とされたことで本流とすらなられた、と私には映るようになった。

しかし、如何に神意によって、神々の助けを得て、神の御心のままになされたこととはいえ、天皇とまでなられた血筋を葬ってしまった怨みは残る。国の人々の亀裂も深まったことであろう。それが我が子の将来の差し障りとなることを皇后は懸念された。麿坂王・忍熊王、足仲彦天皇(仲哀天皇)そして日本武尊の霊を厚くお祭りされた。

皇后は、この和解の仲立ちを少名彦命に求められた。

筍飯に今もお祭りされておられるのは、伊奢沙別命(伊賀大神、御食津大神)

足仲彦天皇(仲哀天皇)

氣長足姫尊(神功皇后)

皇・武内宿禰そして日本武尊である。

皇后は都を遷向(まきむく)から磐余(いはれ)に移された。磐余彦尊(神武天皇)の中洲進出の最初の地であり、皇后が新たな国の流れを造るためになされた人心一新の遷都であろう。ただ、遷向は、大物主神のお膝元である。兵が集まらなかったとき、大物主神の助力を得たことへの感謝、都を遷向から磐余に移すことへの理解をも、

少名彦命を通じて願っておられるようにもみえた。

皇后と武内宿禰の願いは、譽田別天皇(仁徳天皇)として大鷦鷯天皇(仁徳天皇)の御世に結実する。いわゆる河内の政権、海洋国家としての豊かさを取り戻した政権である。かつての奴国や卑弥呼の女王国がその先駆であった。この二つの政権の時代には、楽浪郡や帯方郡で行き場を失っていた漢人が列島にやってくる。

日本における中央集権的な国の形成には彼等の知識や技術が不可欠であった。いわば、明治における開国と比することができよう。二人がなされたことは、当時の中洲(奈良盆地)の氏族に容易に理解されたとは思われない。

日本武尊は九州の熊襲や東北の蝦夷の平定に大きな功績があった。しかし、武力平定のみで国の統一が出来るものではない。源義経は軍事的天才であったが幕府を開くという頼朝のごとき政治感覚は持ち合わせていなかった。日本武尊もそうであった。

この時代にそのような政治感覚を持つ者を探せば、武内宿禰に辿りつくしかあるまい。宿禰が皇后を一番理解できる立場にあったろうが、皇后の内面、その気持ちのひだに入り込むことができたとは思えない。

皇后の孤独を癒してくれる存在とは何であったのか。誰が皇后のお気持ち汲むことができたのか。皇后を臨月の身で、男装し遠征軍の先頭に立ち、叱咤激励する軍神のごとく祭り上げる人がでた。女王卑弥呼の姿を隠すために、その時代の女帝にしてしまう人もでた。百済の近肖古王の馬韓平定を助け、七枝刀を贈られた皇后とする人も、広開土王談徳の時に新羅の人を連れ帰った皇后とする人もあった。

未来に、そして過去にワープさせられ、一体どの時代におられたかすら分からなく、その素顔すらみることのできぬありさまである。

「此の御酒は 吾が御酒ならず 神酒の司 常世に坐す いはたたす  
少御神の豊寿き 寿き廻ほし 神寿き 寿き狂ほし 奉り来し御酒を あさず

飲せ ささ」。皇后がその孤独を癒すことができた存在とは少御神のみであったのだろうか。成人した御子を見る皇后に、少御神が心配することはないというなずかれ、私が醸み、狂ほしくまで神々の間に寿きめぐらせて、奉納する御酒と告げられた。皇后がここまで狂ほしくも御子を守りなされたことを、少御神は善しと寿きくだされている。ここまでは道を踏み外してはいなかった。神々もそれをうなずいてくだされている。皇后はこれを残さずいただくのです、と御

子におすすめになられた。母の情ならむ。皇后はこれまでのことには、安堵されたことであろう。しかし、御子の治世が実現しないかぎり、不安は去らない。

古代ギリシアにおける神託を得た英雄の運命は、奈落の底の上の狭い道を歩くに等しかった。「汝自身を知れ」と告される。自制心を失い警告を無視すれば闇が目を覆い、神託をのがれようと知恵を働かせば、それが傲慢とうちのめされる結末が待ちかまえていた。それは、わが国の神託とて変わらない。お腹に世を治めることになるかと告げられた御子をかかえその道を進むことの不安と孤独。武内宿禰にも、こればかりは如何ともし得なかった。皇后がここまで来られたことは、類稀というほかあるまい。



十、おわりに

東アジアの歴史は中国王朝の在り方に左右されてきた。王朝が交代すると滅ぼされた王朝の末裔が逃れてきた。そして、漢が興り、その文化を周辺国に押し広げ、その徳を慕って朝貢することを歓迎するようになると、東アジアにおいても朝貢をして、王たることを安堵してもらいたいと思う族長があらわれた。その朝貢ルートを閉ざすような部族があれば、帝はこれを討伐した。漢の武帝が、衛氏朝鮮を討ち楽浪郡を置いたことが、この地域に大きな刺激をもたらした。幕末に下田や横浜に現れた欧米人のごときものである。

後漢の時代に、北九州の奴国が朝貢し、王に叙任されたことは画期的な出来事であつたろう。倭国の帥升等も生口百六十人を連れて洛陽を訪れたというから相当大きな船を操っていたことになる。しかし、漢が崩壊すると楽浪郡も不安定となった。しかし、あの女王卑弥呼が親魏倭王に叙せられ、印授と膨大な贈り物を携えた漢人使節が、邪馬台国の卑弥呼を訪れたことは、長く語り草となるイベントであつたに相違ない。列島の倭国は、実に早くから、交易に関して敏感であり旺盛であつた。しかし、晋が八王の乱(291-306年)以降求心力を失うと五胡十六国という乱世に陥り、中国の影響力は低下した。

影響力は低下したが、漢文化の伝播が現実化していた。中国では北方の部族が漢文化、漢人を採用し南下して国を運営しはじめた。半島においても同様であり、小獸林王しょうじゆりんの高句麗は、前秦王の苻堅ふけんに帰順し、浮屠(仏教)への順道を受け入れ、同時に文教政策を導入し、儒教に基づき大學を建てて子弟教育を行った。また、律令を定めたともされ、中国風の中央集権国家づくりの基盤を整えようとした。百済の近肖古王が強力化したのも、楽浪郡経由でもたらされた漢文化をいちはやく受容し、漢人登用による国家づくりを行ったことであつた。馬韓、辰韓、弁韓という部族連合社会から。百済、新羅、加羅諸国が国を形成する運動といつてもよい。

こういう東アジアの動きは列島にも伝わっていた。奴国、邪馬台国に連なる伝統は北九州や日本海側の海人に受け継がれており、これに反応したのが、武内宿禰であり、氣長足姫尊であつた。近肖古王との連携が導入されているのは、皇后がその道を開いたことを強調するものであり、その子の時代のヤマトはこの王と組むことにより、半島における軍事的役割を飛躍的に増大させた。

ただ、近肖古王が東晋から、「鎮東將軍領楽浪太守」を叙任したこと、皇后の後継となる譽田別天皇(応神天皇)そして大鷦鷯天皇(仁德天皇)の政権も半島における將軍職の叙任を求めて入貢したことは、徹底して古事記や書紀において削除された。そればかりか、奴国から邪馬台国に至る入貢、王の叙任の歴史も封印された。

また、敦賀に加羅の王子が帰化した、あるいは、播磨に新羅の王子天日槍が帰化を求めたという話を展開しておきながら、皇后の時代になって、神託によりはじめて新羅が発見されるという設定がなされ、それ以前はまるで鎖国状態

であつたかのごとき扱いとすらされた。

これは、書紀や古事記の編纂された時代の事情による。中国では三百年の乱世を経て強力な隋王朝が出現していた。大土木事業が行われ巨大な王城が建設され、大運河が河北と江南を結び、その繁栄は周辺国を圧倒した。その隋が半島の高句麗を三度攻めて、三度破れたことは東アジアに少なからぬ影響を与えた。遣隋使を派遣していた聖徳太子は、隋の強大さとこの敗戦を徹底的に調べ、そのことを要請し、日の出ずる国の天子と称する国書を持たせることになる。その隋が唐に打倒されたことも驚きであつた。唐は、一旦、高句麗攻略を停止し、高句麗の南下とヤマトと盟を結ぶ百済に押される新羅の救援を容れ、百済を攻めた。百済とヤマトは白村江で決定的な敗北を喫す。勝利した唐と新羅は、高句麗を攻め、668年に攻略し、唐は念願の高句麗を手中におさめた。しかし、新羅はしたたかであり、高句麗の遺臣らと反唐の運動を起こしつ、唐との交渉を重ね、675年唐の撤収に持ち込み、半島を統一した。

ヤマトが唐、新羅の連合軍の列島侵攻を恐れ、国防に邁進したことはいうまでもない。しかし、壬申の乱をへて天武天皇の御世(673年)になりしばらくすると、唐が半島から撤退したことにより脅威はうすれ、王化の鴻基(大事業の基礎)、つまり、律令の制定、兵制改革、遷都、貨幣経済(銅銭鑄造)への移行、古事記、書紀、万葉集、風土記編纂等の事業に着手することができた。大化の改新はクーデターの不気味さがにじんていたが、この時には、何か新しいヤマトが生みだされるのではないかと云う期待感があつた。

その時、朝貢の歴史を引きずる国号、倭を日本やまととした。朝貢を認めることは、属国とみなされること、中国の歴史の中に組み込まれ、中国皇帝の支配が及ぶ地域とみなされる。中国はこの平成の時代にあつても、高句麗を中国の歴史の中に組み込むことを国是としている。高句麗の領土は今の北朝鮮と重なる。金政権が最も恐れるのは、中国であつて不思議はない。ヤマトは外交におけるのみでなく、これを史書からも払拭することを定めた。

奴国、邪馬台国は削除され、卑弥呼の代役に氣長足姫尊おきながたらしひめのみことが立てられた。皇やまと後の日本は朝貢されることはあつても、朝貢するなどありえないという立場が一貫する史書編纂となつた。皇后にとっては、極めて迷惑なことである。

人の言葉は口伝する過程で変化し、尾ひれがつき、当初のものとは似ても似つかぬものとなることが多い。それに比較すれば、歌は、字数がきまり、言い回しがあり、せいぜい字数のあつた言葉を入れ替えることくらいしかできない。また、ことばを用いることには変わりがないが、情や景を音楽や絵画のごとく、浮かび上がらせることができる。いかに前後を作為してみても、歌のころは変わり難く、その作為を突き崩す力を秘めている。氣長足姫尊の抱かれた、おそれとおののきと安堵のころ、その伺い知れぬ孤独を、その歌に垣間見れば、臨月で軍船を率いて海を渡るなど、絵空事と知れるであろう。

おそらく、皇后と卑弥呼の時差は、団塊世代の私が父から日本海海戦における連合艦隊の司令長官東郷平八郎の話をきかされるようなものだろう。父はいえ、提灯行列で湧きかえる日々に子供心を躍らせた出来事として、祖父から聞かされたこと、という時間感覚で、決して遠い昔ではない。

卑弥呼の時代は、中国が魏、呉、蜀に分かれて覇を争った三国時代である。

半島では高句麗に代わり遼東の公孫淵が楽浪郡や帯方郡まで力を及ぼしていた。女王国の半島の北や大陸との交易はこの公孫淵を経由せねばならなかった。ところがこの公孫淵は、呉と蜀が魏に対抗し結ぶや、呉の孫権に呼応し魏の背後を脅やかす挙に出るが、呉と蜀の同盟が機能しないとみるや、孫権の使者を斬り首を魏にさし出すという変わり身の早い男で、煮ても焼いても食えないしたかなタイプであった。卑弥呼も対応に窮したことであろう。

魏は諸葛孔明亡き蜀に勝利し、後顧の憂いを断つべく、司馬仲達を將軍として、遼陽城に公孫淵討伐の兵を送った。しかし、膠着状態に陥っていた。その時、卑弥呼は、伊都国の一大率を中心に如何なる情報を集めて成算を確信したのか、魏の明帝が密かに帯方郡に派遣した劉昕りゅうきん（後の帯方太守）、鮮于嗣せんうし（後の楽浪太守）と接触し、魏と結ぶ決断を下した。238年のことである。

卑弥呼の決断により、海運力を持つ倭国が公孫淵の背後で魏の帯方郡への侵攻を援助することになり、膠着状態のバランスが崩れ、公孫淵が退路を失い破れ、一時期、魏は楽浪郡、帯方郡のみならず、半島の北側全域を制圧した。卑弥呼は親魏倭王に叙任され、この地域において倭国の海人は大手を振って、港に入り交易の利を求めることができたに違いあるまい。そのような歴史が語り継がれていないはずがない。

このような歴史的現実がなかったことになる史書は、徳川將軍は江戸を治めるだけの將軍、日本は一貫して天皇の国、ペリーも欧米も天皇に朝貢を求めてやって来た、明治維新？そんなものは一切無い。米国との通商条約、欧米諸国との条約改正、それは江戸の將軍のことで、当時の日本の都は京都、天皇がさような不平等な条約をお結びになる訳がない。江戸を平定され將軍を放逐され東京として都を移され、日清、日露戦争に自ら出陣され兵を鼓舞して勝利された、とするような史書を編纂するものだ。氣長足姫尊が卑弥呼を知らないとするは、昭和天皇が最後の將軍徳川慶喜も坂本竜馬も御存じないとするがごときで、大変失礼で、ありえない。

卑弥呼から神秘的なシャーマンというイメージしか出ないとするなら、これも失礼なもので、それでは卑弥呼の国際感覚、情報収集・形勢の分析・大局の判断を説明することはできまい。選択した相手といい、そのタイミングといい巫女の神懸りの占いとは異質、政治家の決断である。

倭国はあの帥升等以降、「その國、本また男子を以て王となし、住まること七、八十年。倭國乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち共に一女子を立てて王となす。名づけて

卑弥呼という。鬼道に事え、能く衆を惑わす。年已に長大なるも、夫婿なく、男弟あり、佐けて國を治む。王となりしより以来、見るある者少く、婢千人を以て自ら侍せしむ。(魏志倭人伝)」という。「鬼道」と「衆を惑わす」のところから、そういうイメージになったのかもしれない。

卑弥呼がどのような境遇のなかで、あのような決断をされたかは分からない。乱れていた倭国に七、八十年の長きに亘る平和をもたらし、魏と結び半島のみならず大陸との交易をも復活された。輝ける成果であった。この女王の治世なくして、日神である天照大神が女神とされることはなかったのではあるまいか。「太古、女性は大陽であった」、この言葉を彷彿させる女王であられた。皇后にとって、卑弥呼こそ心を開き、お気持ちを分かつことのできる唯一の人、と私には思えた。

鉄の女と称された英国のマーガレット・サッチャー首相もエリザベス女王の系譜を抜きにしては存在できない。女王卑弥呼が氣長足姫尊の道を開かれた私にはそうみえた。閉塞する政治状況に追い込まれ、皇后は、孕んだ子を守り産む母性の本能的な嗅覚により、直感的に我が子の未来を開かれた。それを妨げるものを避け、見切り、生き残る力を持つ者を選び、取りこみ、用いる。その結果を慎重に確かめ、敵の弱点を突き、ひたすら味方を増やし、なりふり構わず勝ちを求め、亀裂の修復にも意を用いられた。なんと苛酷な神託であったことか。それが御子のみならず日本やまとの新しい世の地ならしとなっていた。すぎまじき政治家ではあるまいか。

そのタイムトラベルを終えて平成の世に戻ると、戦後最大の国難とされる東北関東での震災、津波、原発事故があった。避難生活を余儀なくされる多くの人々がおられ、行方不明のまま供養された人々も少なからずおられた。一切を根こそぎ奪われた人々を前にして、国会と政府は、中央の対立の構造、安定を維持せんとする後方の世論に挟まれ、その機能を果たせぬ状態にあった。現実を直視して行動せぬ政治に対する被災者の心象は、ムンクの絵画「叫び」のごとく、赤黒く灰色の陰鬱と不安にゆがみ、我慢の底に怒りと憤りを押し込めていた。

絶対安全とした基準、補償額を千二百億円で足りると設定した法案の不備による結果に苦しむ人々を前にして、決定した当事者でないとしても、政府や国会の過失であることに変わりない。それを自覚するなら救済に邁進するのがあたりまえである。それができぬ政治、それこそが国難である。野党は首相の政権延命に協力は出来ないとし、与党は補償財源十兆円、震災津波よりの復興財源二十五兆円を目前にし、財源が定かでないマニフェストを切り捨てることすらできない。リストラを求められているのは、東電のみではない。国民は、高度経済成長の遺産を担保に、問題を先送りにし、限度一杯の借金を重ねる政治に身を委ねてきた。この延長線上には、もはや未来は無い、震災はその現実を突きつけた。「我欲を一回洗い落とす必要がある。積年たまった日本人の心のあ



かをね。これはやっぱり天罰だと思う。被災者の方々、かわいそうですよ」と申された知事がおられた。幕末には、「日本を洗濯致したく候」と申された人もおられた。

皇后のお姿が、まぶしくも蘇った。